

西付城跡

(肥後国衆一揆の舞台を探る)

山鹿市文化財調査報告書第13集

1993

山鹿市教育委員会

西付城跡

(肥後国衆一揆の舞台を探る)

山鹿市文化財調査報告書第13集

1993

山鹿市教育委員会

序 文

本書は山鹿市教育委員会が平成4年度に実施した西付城遺構確認調査の報告です。

西付城は天正15年肥後国主であった佐々成政が、山鹿城村城に立て籠る隈部一族を攻めた際築城したと伝える城で、築造年月日と使用期間が明らかな数少ない城と言えます。

また、この戦は肥後国全体に波及しついには肥後国衆一揆となり、その後の豊臣秀吉の政策に多大な影響を与えたものとして歴史的にも重要な事件でした。

今回の調査では西付城の構造を明らかにすることを目的として実施しましたが、外堀をはじめ三重に巡らした堀の確認や、入口施設の存在など数多くの成果を上げることができました。

幸いにも城村城と西付城の中心部分については既に公有化を行っており、将来に向けての整備の資料が得られたと考えております。

この報告書が郷土の歴史を理解するための一助となれば幸いです。

なお発掘調査にあたり、地元の方々をはじめ多くの方々の御尽力に対し深く感謝の意を表します。

平成5年3月31日

山鹿市教育委員会

教育長 北井 澄生

例　　言

1. 本書は山鹿市教育委員会が国庫補助事業として実施した西付城の貴構確認調査報告書である。
2. 調査は山鹿市教育委員会が主体となり、文化課において実施した。
3. 本調査におけるレベルは仮基準よりの数値であり、標高を示すものではない。なお仮基準は西付城記念碑の台石上段の北西隅を0としている。
4. 本書の執筆は中村幸史郎が行った。
5. 本書の遺構実測図等については中村が実測・製図を行った。
6. 本書に掲載した写真は中村が撮影し、焼付は一部野田春代が行った。
7. 本書の編集は中村が行った。

本文目次

序文

I 調査の経過	1
1. 調査に至るまで	1
2. 調査の組織	2
3. 調査の経過	2
4. 肥後国衆一揆の概要	3
II 立地環境	5
III 調査の成果	13
1 中央グリッドの遺構	13
(1) 東側拡張部	13
(2) 南側拡張部	14
2 西側第1トレンチの遺構	15
3 西側第2トレンチの遺構	15
4 東側トレンチの遺構	16
5 北側トレンチの遺構	27
6 南側第1トレンチの遺構	27
7 南側第2トレンチの遺構	28
IV まとめ	37

挿図目次

第1図 位置図（中村幸史郎作成）	
第2図 トレンチ配置図（中村測量・製図）	
第3図 中央グリッド東側拡張部実測図（〃）	
第4図 中央グリッド南側拡張部実測図（〃）	
第5図 銅銭拓影（〃）	
第6図 西側第1トレンチ実測図（〃）	
第7図 西側第2トレンチ実測図（〃）	
第8図 東側トレンチ実測図（その1）	
第9図 〃 （その2）	

第10図 シ (その3)

第11図 北側トレンチ実測図(その1)

第12図 北側トレンチ実測図(その2)

第13図 南側第1トレンチ実測図

第14図 南側第2トレンチ実測図

第15図 西付城遺構配置想定図

第16図 東・西付城地籍図

第17図 東・西付城遺構配置想定図

図版目次

図版1 西付城城床全景(西より)

2 1 銅銭出土状況

2 銅銭

3 1 中央グリッド東側拡張部(西より)

2 シ (南東より)

4 1 シ 土層(南壁面)

2 シ (北壁面)

5 1 シ 柱穴

2 中央グリッド南側拡張部遺構(東より)

6 1 シ 遺構検出状況(北より)

2 シ (南より)

7 1 西側第1トレンチ(西より)

2 シ (東より)

8 1 シ (城床土層断面)

2 シ 内堀検出状況

9 1 西側第2トレンチ発掘風景

2 シ 内堀検出状況

10 1 西側第2トレンチ全景(西より)

2 シ 内堀検出状況

11 1 東側トレンチ全景(西より)

2 シ (東より)

- 12 1 ハ 中堀端部検出状況（東より）
2 ハ ハ （西より）
- 13 1 ハ ハ （南より）
2 ハ 外堀全景（西より）
- 14 1 ハ 外堀検出状況（北より）
2 ハ ハ （南より）
- 15 1 北側トレンチ全景（南より）
2 ハ （北より）
- 16 1 ハ 外堀検出状況（北より）
2 ハ ハ （南より）
- 17 1 南側第1トレンチ内堀上面（東より）
2 ハ ハ （西より）
- 18 1 南側第2トレンチ全景（北より）
2 ハ （南より）
- 19 1 南側第2トレンチ内堀端部（東より）
2 ハ （南より）
- 20 1 ハ 外堀（西より）
2 ハ ハ （南より）
- 21 1 現場説明会風景
2 発掘調査に参加した人々

I 調査の経過

1 調査に至るまで

近年地方の時代と言われ郷土の歴史再発見の気運の高まりを見せており、山鹿市に於いても例外ではない。

山鹿市では天正15年（1587）の肥後国衆一揆では肥後の国主佐々成政と山鹿の城村城主隈部親安、さらに父親の親永との合戦が山鹿の城村城を主戦場としており、多くの文献に合戦の様子が記されているところから人々の関心が高く、研究熱心な人達が多い。

城村城の戦いの舞台となった平小城校区では最も熱心で、文化財顕彰会を結成し校区に残された文化財の保護と顕彰を目的として活動が推進されている。

この会では城村城の戦いの舞台となった、城村城と戦に付隨して立てられた東・西付城の顕彰に力を入れており、校区民から募金を募って立派な記念碑が立てられている。

行政サイドでも肥後国衆一揆から400周年にあたる昭和62年12月歴史的共通基盤をもつ山鹿市、三加和町、鹿央町、菊鹿町の1市3町が連携しシンポジウムを開催した。

会場には700人にのぼる人々が熱心に討論に耳を傾け関心の高さを見せ付けられた。

それを契機に関係市町が集い行政による肥後国衆一揆顕彰会議が結成され、中世城整備の促進、広域周遊ルートの整備促進、顕彰・啓発並びに広報活動の実施などの事業を行い、地域の活性化さらに広域観光振興の促進を計ることを目的とし、行政の枠を越えて中世城の保存に力を注ぐ事を確認し今日まで活動を継続している。

各市町では顕彰会の趣旨に則り独自に取り組み、特に三加和町では田中城（和仁古城）の整備に力を注がれ、事業としての取り組みがされている。

このような環境の中で西付城の中心部分の一部が売りに出されようとしたのであった。

地元では不動産業者の手に渡って開発されるのを防ぐためにも何とか公有化を計り保存してほしいとの要望が出され、地権者の理解のもとに山鹿市では単費で土地の公有化を進め現状のまま凍結保存を行うことに成功したのである。

その後数年が経過し、折から中世城跡の調査や整備が各地で盛んに行われるようになって、西付城の城域の確認調査の要望が出されるに至り、市では将来の整備に備えて公有化した部分を国庫補助（50%）と県費補助（9%）を得て遺構確認調査を実施するに至ったのである。

2 調査の組織

調査主体 山鹿市教育委員会

調査責任者 北井 澄生（山鹿市教育長）

調査事務 永田 征夫（山鹿市文化課課長）
木村 理郎（〃 係長）
渡辺 義明（〃 主事）
高宮 京子（〃 主事補）
次木 万里子（山鹿市立博物館主任主事）
山下 透（〃 技師）

調査員 中村 幸史郎（山鹿市立博物館副館長・文化課文化財係長）

調査指導 河原 純之（文化庁記念物課主任調査官）
石井 進（国立歴史民俗博物館館長）
太田 幸博（熊本県教育庁文化課参事）
黒田 裕司（三加和町教育委員会社会教育課主事）

作業員 野田辰起、前川誠一、吉井新助、小南美雄、田上宗登、伊豆永敏光、
野中元美、倉本敏征、久布白和敬、内田誠一、田上美千代、野中サツ
川崎チエノ、竹下桂子、中村春子、伊豆永トリコ、吉本照子、吉本徹子
江藤カヨコ、瀬口サエ、倉本敬子、野田春代、北原美奈子、田中裕子

調査協力 肥後国衆一揆顕彰会議、鹿本郡市文化財保護委員連絡協議会。桑原憲彰

3 調査の経過

山鹿市が地権者から緊急に買収した土地は地元では城床（しろとこ）と呼ばれている一辺30m四方の畑で、周囲の畑より一段高くなっている土地と、この土地の南西に接する段下がりの土地の2筆で、当初これらの土地を調査の対象として考えた。

従って城床部分に20m四方の調査区を設定し中央グリッドと呼ぶことにした。
中央グリッドでは城床部分が周囲より一段高くなってしまっており、周囲の畑に土を落とすことができないため排土の場所を城床内に確保しなければならず、城床の中心に20m四方の範囲を調査することにし土はその周囲に積み上げることにした。

表土剥ぎは機械で慎重に作業を進めたが、調査直前まで桑と雑草に覆われており、桑の根の除去にかなり困難を極めた。

機械による抜根で遺構が傷むのではとの配慮から極力慎重に作業を進め、調査区内のみ

の桑の根の除去作業に止どめた。

発掘作業も慎重に実施してきたが、約40cmの深さまで掘り下げたが遺構らしきものは何等検出出来なかった。

また、その間、南西の畝には幅3m、長さ約20mで西に延びる西側第1トレントを設定し機械による表土剥ぎを実施した。ここでは孟宗竹の根が多く残っていたため作業が思うように進まなかつた。しかし、このトレントから堀の一部が確認され さらに、調査作業員として周囲の土地の地権者の方々が参加されていたため、トレント掘りであればどこでも掘って下さいとの了解を得、新たに西側第1トレントから北へ20m離れて幅2m、長さ17mのトレントを設定し西側第2トレントとした。

この段階で内堀が存在している可能性が高くなり、東側トレントと北側トレントによって確認したいとの考えで、中央グリッドの東側の畝には幅2m、長さ44mで東に延びる東側トレントを設定し、東側トレントと直角になる北側に延びるトレントは幅2m、長さ24mで北側トレントとした。

これまで西付城は城村城の出城ではとの見解が肥後国衆一揆シンポジウムの中で示されていた事もあり、城の虎口の位置によって佐々成政が築いたものが明らかになると見え、城床の南側に幅約2m、長さ6.5mで東西に延びる南側第1トレントを設置した。

幸いに内堀の端部らしい遺構が検出されたため、南側第1トレントの西側に幅2m、長さ20mで南北に延びる南側第2トレントを設置した。

それまで中央グリッドでは遺構が確認できなかつたので、東側トレントに向かって城床を断ち切るように幅1.5m、長さ6.4mのトレントを入れ東側拡張部とした。さらに、南側トレントの調査結果から虎口の位置がほぼ決定されようとしている事もあって南側に幅5m、奥行き4mの範囲で調査区を広げ南側拡張部とした。

4 肥後国衆一揆の概要

肥後国衆一揆については多くの文献に記されているが、大まかな概要について記しておきたい。

天正15年6月豊臣秀吉は九州平定を終え肥後に入つて來た。彼は中国大陸への進出のために朝鮮半島への侵略の基地として九州を重視していた。そこで、肥後の国主に佐々成政を任じた。

また、この時肥後の52人の国衆達にはかつての所領の半分以下を安堵し、隈部親永にも菊池、山本、山鹿で1900町を持っていたが800町に削減した朱印状を与えていた。

成政に対しては次のような条件が出された。

定

- 一 五十二人之国人如先規知行可相渡事
- 一 三年検地有間敷事
- 一 百姓等不痛様肝要事
- 一 一揆不起様可遠慮事
- 一 上方普請三年令免許之事

右之条々無相違可被守此旨也仍如件

天正十五年六月六日 秀吉 判

佐々内蔵助との

しかし佐々成政は自分の家臣に対しても禄を与えなければならず、7月には検地を開始しようとした、国衆の中でも菊池城に居城していた隈部親永は秀吉からの朱印状を盾に検地に反対をしてついには菊池の城に立て籠もった。

7月24日成政は6,000の兵を以て菊池の城を攻め、戦の火ぶたが切って落とされた。

しかし隈部氏の家臣多久大和守の裏切りによって菊池の城は落城し、親永は山鹿の城村城に居城する子の親安の元へ駆け込んだのである。

城村城では堀をさらえ、柵を列え、食糧などを用意して総勢15,000人が立て籠もったと言われている。

8月7日成政は山鹿に馬を差し向け、まず日輪寺山に斥候を登らせ城村城の様子を伺い、原口で小競り合いを起こしている。

8月12日3,000人の兵を山鹿に差し向けたが城村城の守りは堅く、成政自らさらに3,000の兵を率いて山鹿に出陣した。

この隙に、肥後の国衆達が35,000の兵をもって隈本城を取り囲み、難無く二の丸を落とし本丸を目前に陣を取っていた。

成政は取り急ぎ山鹿から甥の佐々與左衛門を隈本へ帰したのであるが、鹿央町霜野城城主内空閑鎮房の家臣によって討ち取られてしまったのである。

この報を聞き成政は落胆したが、隈本城の收拾に自ら帰る事とし、13日暁より（九州治乱記では暮れ方としている。）東西の付城を築き始め（古城考には付城を三箇所築きとしている。）14日の夜までに完了している。

記録によればこの築城には成政自身が縄張りを行ったとの事であり、東の付城には前野又五郎をはじめ170名、西の付城には三田村勝左衛門をはじめ180名を置いている。

15日未明成政は隈本城に戻り悪戦苦闘の末何とか事を収めたのであった。

しかし、城村城の戦は決着がつかず、佐々勢はついに兵糧が尽き飢餓に至るものも出始

め、成政は筑後柳川の立花氏に援軍の要請を行った。

9月7日立花氏は兵糧を袋に入れ2,000の兵に運ばせ、首尾よく東西の付城に入る事が出来た。しかし、帰路に隈部勢有働志摩守が討つて出てきたため永野原で合戦となり立花勢が勝利を得た。

成政は秀吉にも援軍を要請しており、結果的にはこの事を契機に九州、四国の武将20,000人が押し寄せ、城村城の開城となつた。

隈部親子は秀吉の命により切腹、佐々成政も尼崎で切腹となって、肥後の戦乱は収まつたのである。なお、お城番として生駒雅楽が城村城にきて戦後処理を行つたようである。

その後東西付城は畠や山林に姿を変えて今日に至つてゐる。

II 立地環境

西付城は熊本県山鹿市大字城字院の馬場に所在している。

山鹿市は熊本県の北部に位置する人口34,000人の田園都市で、周囲を鹿本郡鹿本町、鹿央町、鹿北町、玉名郡三加和町と接しており、古くから温泉地として知られている。

山鹿市を流れる菊池川には大小65の支流が流れ込んでおり、熊本県北部に降った雨の殆どが集まるため菊池から山鹿までの間では広大な氾濫源が形成されているおり、重要な穀倉地帯となっている。

また、菊池川の支流のうち最も長いのが岩野川である。この岩野川が菊池川に合流する僅か1km上流に東西付城と城村城が在る城地区が位置している。ここは岩野川の右岸に発達した阿蘇凝灰岩の台地が広がり、川に沿つた氾濫源にはかつて条里の跡が見られ、水田の歴史の長さを見る事ができる。

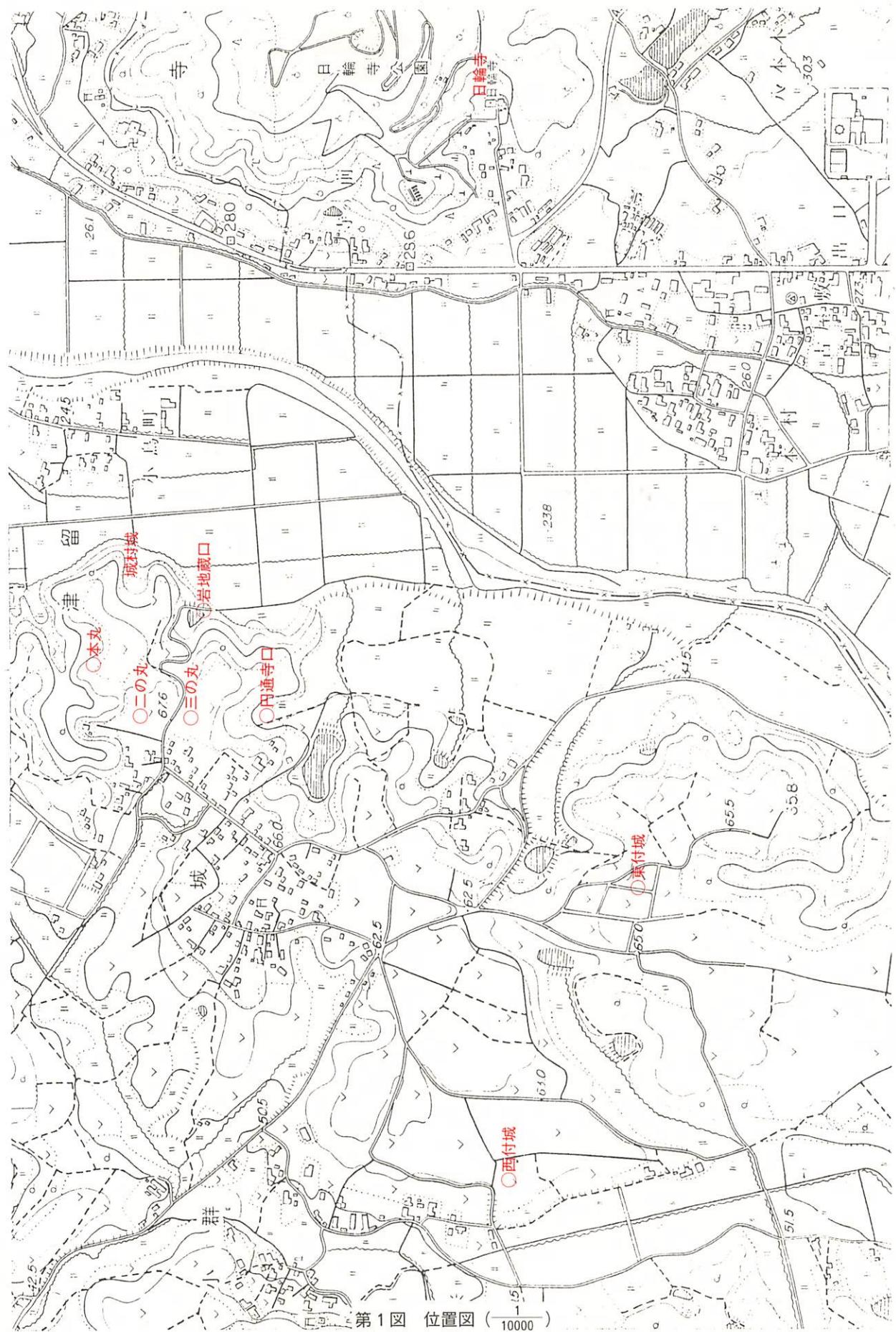
台地は東西500m、南北3kmで細長く菊池川との合流地まで延びており、校区名から平小城台地と呼んでいる。

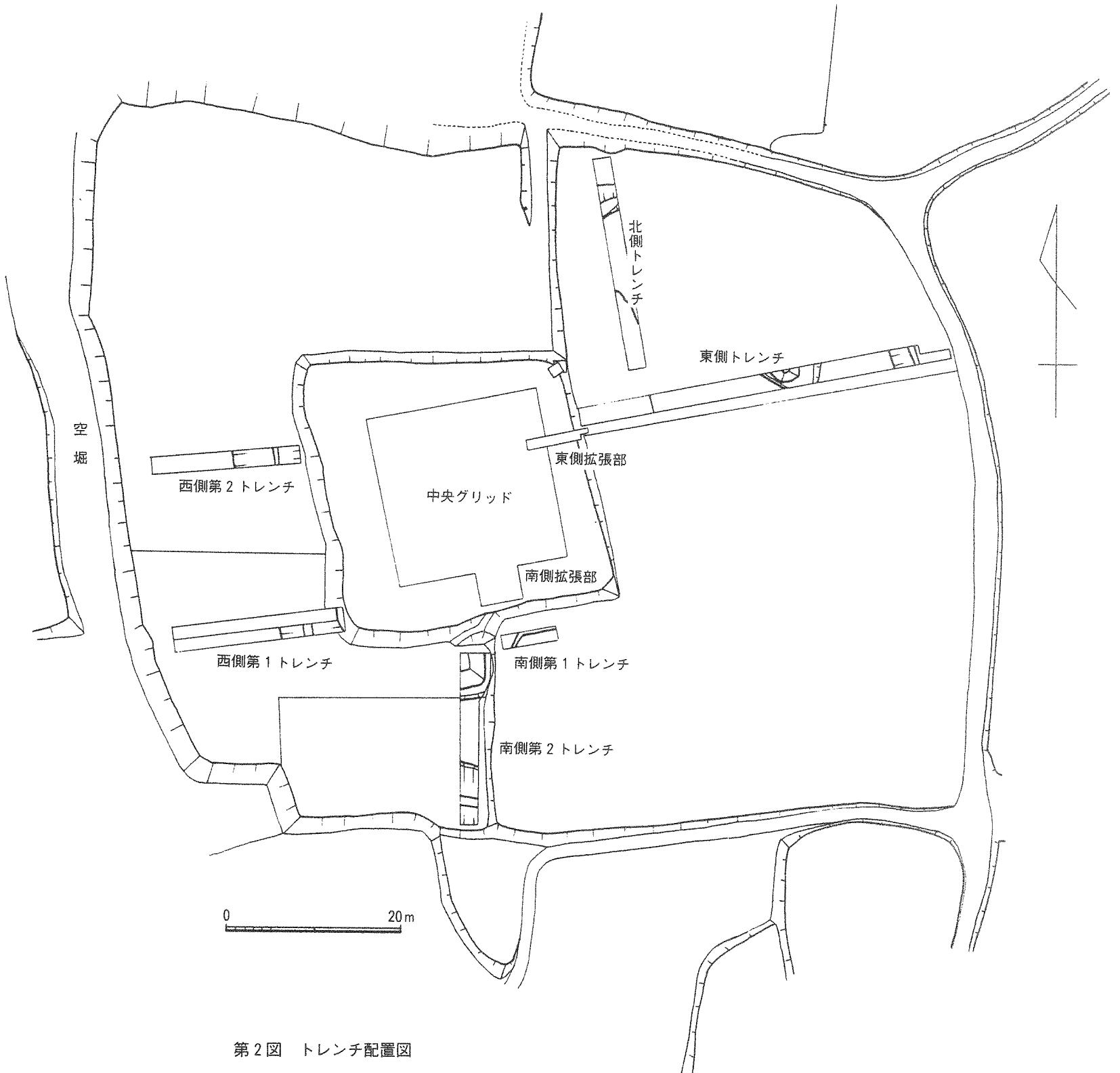
台地上には旧石器時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代の遺跡さらには中世城が残つておる、山鹿市でも最も古くから人々が暮らしていた場所で在つたことが知られている。

特に古墳時代では数多くの古墳や横穴群が遺され、その中でも装飾古墳は国指定史跡チブサン古墳、県指定史跡ではオブサン古墳、馬塚古墳、付城横穴群、城横穴群などが内外に知られている。

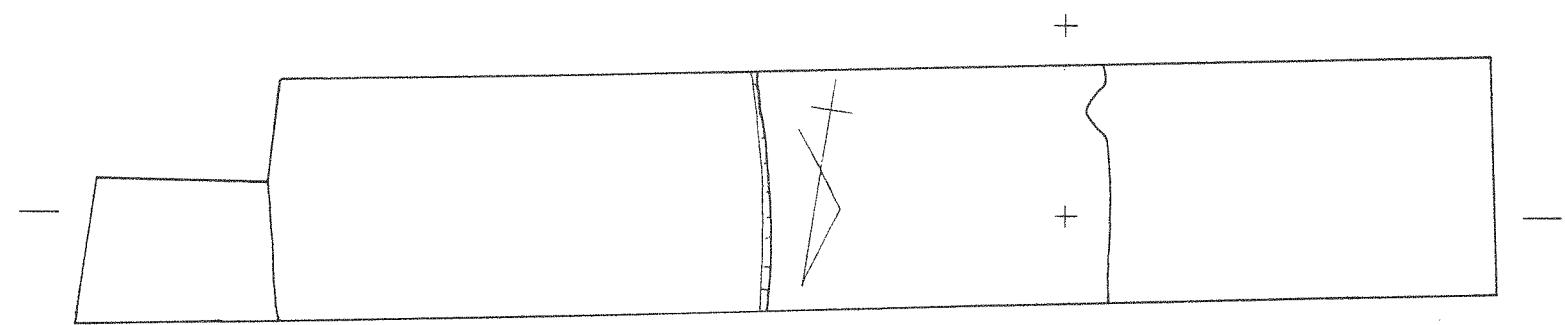
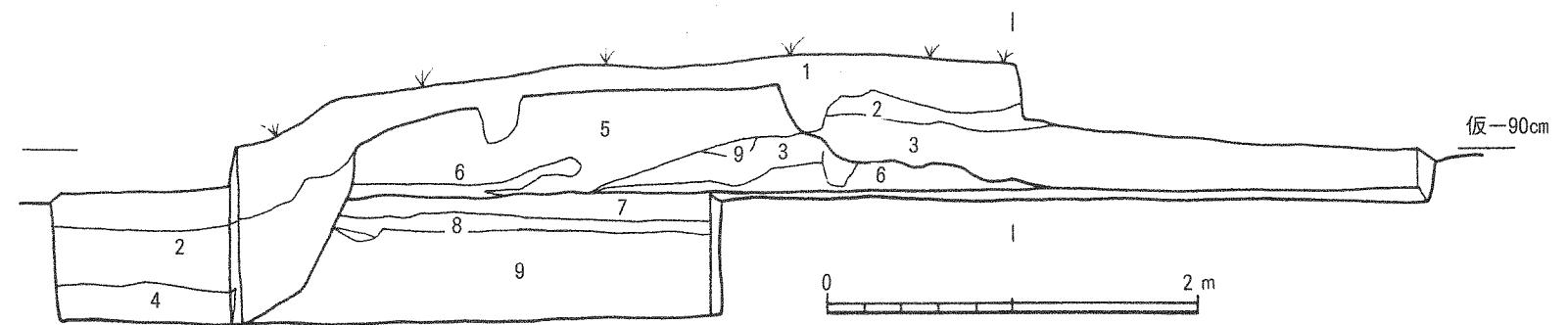
西付城はこの平小城台地の西端に位置し、東付城とは小さな谷を挟んで東南東600mの距離にあり、城村城は北東へ1kmの位置に在る。

現在この台地は畠作が主に行われ、かつては桑畠ばかりであったが、構造改善事業の普



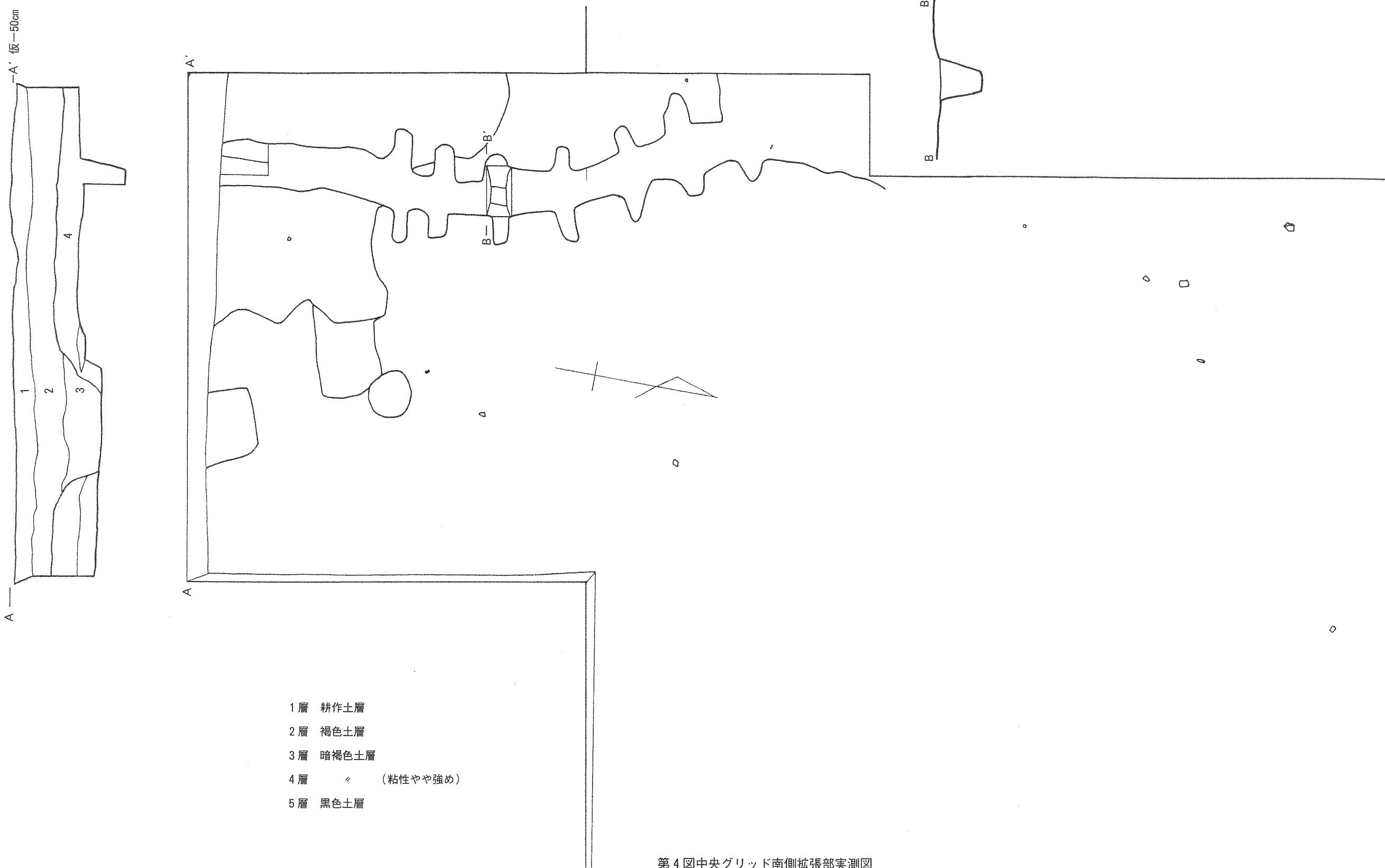


第2図 トレンチ配置図



1層 耕作土層	5層 黃褐色土層（黑色土混入）	9層 黃色褐色土層
2層 黑色土層	6層 黑色土層	
3層 褐色土層	7層 褐色土層（旧地表面）	
4層 暗褐色土層	8層 暗褐色土層	

第3図 中央グリッド東側拡張部実測図



第4図中央グリッド南側拡張部実測図



第4図中央グリッド南側拡張部実測図

及によりスイカの栽培が盛んでビニールハウスが所狭しと立ち並んでいる。

昭和46年の構造改善事業によって残念ながら東付城の遺構が破壊されてしまった。

現在西付城は大半が畠となっており、城床と呼ばれる一辺約30mの畠を取り囲むように畠が広がっている。城村城とは反対方向の西側には山林が残っており、この中に僅かに堀の跡が見られた。この事から西付城は本来城村城の出城であったのを佐々軍が占領して付城として利用したのではとの見解も出ている。

III 調査の成果

1 中央グリッドの遺構

ここでは城床が周囲の畠より、東側では70cm、西側では2mの落差が見られるところから、台地状に盛土をしてこの上に建物を立てたものと考えた。したがって建物遺構とその配置を確認し付城の構造を明らかにすることを目的とした。

しかし、調査開始段階から排土置き場を考慮した発掘を進めなければならず、全体を約40cm掘り下げても遺構が検出されず、20m四方の調査区域をこれ以上掘り下げた場合ついには排土置き場が不足する事態が予測され、それまで中央グリッドでは遺構が確認されなかったので、部分的な調査方法に変更し排土量を極力減量し尚且つ城床の解明を行うこととした。

遺構面の確認と盛土の状態を明らかにするため東側トレーニングに向かって城床を断ち切るように幅1.5m、長さ6.4mのトレーニングを入れ東側拡張部とした。

さらに、南側トレーニングの調査結果から虎口の位置がほぼ決定されようとしている事もあって入口部分の施設を確認したいと南側に向かって幅5m、奥行き4mの範囲で調査区を広げ南側拡張部とした。

(1) 東側拡張部

地表下70cmの深さで旧地表面を確認する事ができ、トレーニングの中でも東側4mの範囲に広がっていた。さらに西側には焼土、白粘土、炭化物の混在した土層が確認され、当時の遺構面の上面であることが明らかになった。

東側では内堀に続くラインが確認され現在の城床基底部の真下に存在していることが明らかになった。

土層断面からは自然地形を利用した築城で、旧地表の上に基底部幅3.7m、上面幅2.2

m、高さ50cmの土壘を築いていた事が判明した。

ただ、土壘の規模についてはあくまでも現状での数値であり本来の規模を示しているものではない。

特に土壘内側の斜面には削り取られたかのような曲線が残っており、本来はもっと直線的な立ち上がりが見られるのではなかろうか。

土壘の本来の規模は、城床中央部で旧地表面を削り込んで建物を立てているところからも基底部幅が約4m近くになるものと推察される。

高さについては推定の域を脱しないが、土壘が城床を周回するように築き、その後中央部の窪んだ所に土壘の土が崩れ流れたとした場合、現状の2倍以上の高さの土が必要となり高さ1~1.5mの土壘であったと推察される。

遺物については何も出土しなかった。

(2) 南側拡張部

今回の調査ではこの部分の調査が最後の段階になってしまったため徹底して追及できなかつたが、何とか入り口の施設に関連した遺構を確認することができた。

地表下約70cmに旧地表の層が広がり、南西部ではその上にかぶさる形で硬化面をもつ土層が広がっている。

さらにこれらの土層を断ち切るように幅30~50cm、長さ5.5mの遺構が南から北へ弧を描きながら延ているのが検出された。

この遺構は硬化面の部分では直線的な溝であるが、そこを過ぎて中に入ると左右に突出した形となっている。現状では6対の出っ張りが確認された。

溝の一部を掘り下げてみた結果、深さ40cm、下部幅20cm程度で中には硬化した土がブロック状に入っていた。

現在の状況でこの遺構の性格を考えた時、柵列的なものが有力であるが、北側では溝状にならず左右に大きく広がっており、道路状遺構の可能性も残っている。いずれにしても今後の課題として将来の調査に期待したい。

遺物は少量出土しており、中央グリッド南東角で半欠の銅錢が出土した。この錢は右上から左下にかけて欠けており、篆書体で孔の上に『元』、左に『寶』の文字が解読できる。この貨幣については元の文字からはじまる中国の貨幣を見ると元符通寶、元豊通寶、元祐通寶、元開通寶、元平宋寶等がある。

しかし残された文字のうち寶の字の特徴から元符通寶か元豊通寶の可能性が高い。



第5図 銅錢拓影

2 西側第1トレンチの遺構

このトレンチでは現在城床の西側の林の中に空堀が残っており、城床との間の遺構を確認することを目的として城床南西角から西に延びるように設定した。

当初幅3m、長さ約20mで表土を剥いだが、約50cm掘り下げた段階でも竹の根が広がっていて作業が困難をきたしたため幅を半分の1.5mに絞って発掘を遂行した。

調査の結果、城床に接するように上面幅6.5m、下面幅1.1m、深さ2.8mの規模で南北に延びる堀が検出された。なお、上面の幅については堀の外側が僅かに傾斜しながら延びており、最大で8.6mを測る。

堀の内側では東に僅かに曲がっているのが確認された。このことから堀は城床を周回する形で築かれていることが考えられた。

さらに堀の外側には幅1.5m、深さ40cmの浅い溝も確認できた。この浅い溝の西側から土層の状況に変化が見られ、特に旧地表面が西に傾斜しながら延びており、その上には白粘土の層を始めとして盛り土していることが観察された。

従って、本来の地形は東側が高く、西側に向かって傾斜していたものを、堀を築いた段階で外側に土壠状に積み上げたものと推察される。

堀の埋土は堆積の状況から大きく3段階で堆積したものと考えられる。

遺物の出土はあまり見られなかった。

3 西側第2トレンチの遺構

西側第1トレンチで検出された堀の追跡調査を目的とし、北へ約20m離れて幅2m、長さ17mのトレンチを設定した。

ここでは堀の規模は上面幅7.7m、下面幅90cm、深さ2.9mを測り、第1トレンチと同様に堀の外側に幅1.5m、深さ35cmの浅い溝が見られた。この溝がどのような性格かは断定できなかったが、堀に付属した溝であることは間違いないさうである。また、この溝の西側からも傾斜した旧地表の層とその上に盛り土の白粘土層が確認された。

堀の埋土は大きく4段階で堆積しているようであった。遺物の出土は見られなかった。

4 東側トレンチの遺構

西側の各トレンチで検出された堀が周回していることを確認するために幅2m、長さ44mのトレンチを城床から東に向かって設定した。

当初ここでは堀の上面の確認のみを目的としていたが、トレンチ西端部と中央部さらに東端部の3ヶ所に於いて遺構が検出されたため、西端部の遺構については西側トレンチで確認していたこともあって上面の確認に止どめたが中央部と東端部の遺構については予期していなかったので発掘を進めることとした。

西端部の堀は城床の東端から8.6mの幅で南北に延びていることが確認され、西側の各トレンチで確認されたものと同様であり城床を取り囲んでいたことが明らかになった。

中央部の遺構は埋土が他の遺構のものよりやや黒っぽい色であったため、古い時期の遺構であろうと考えて掘り始めたが、付城の堀の端部が検出されたのである。

城床の東端から25mの場所で上面の最大幅7.2m、下面幅66cm、深さ2.4mの規模で掘られている。堀は北からやや西に寄った方向で延びており、三面の壁は丁寧な仕上げになっていて端部に沿って並ぶ3個のピットが見られた。

東端のピットには炭化物か堆積していたがそれぞれの距離は2.5mと等間であるところから城戸が築かれていたものと考えられた。

また、未調査ではあるが堀の南にはが土橋を挟んでさらに同様の堀が存在するものと推察される。

堀は逆台形の断面であるがやや膨らみを持ちながら立ち上がっている、特に堀の内側になる西側では階段状の掘り込みが見られた。

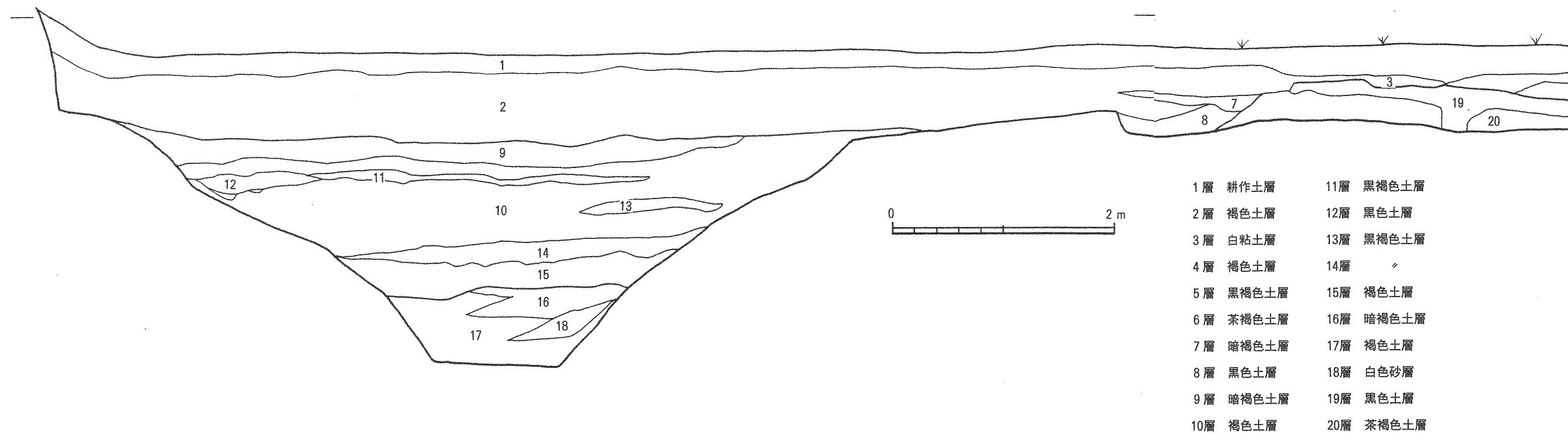
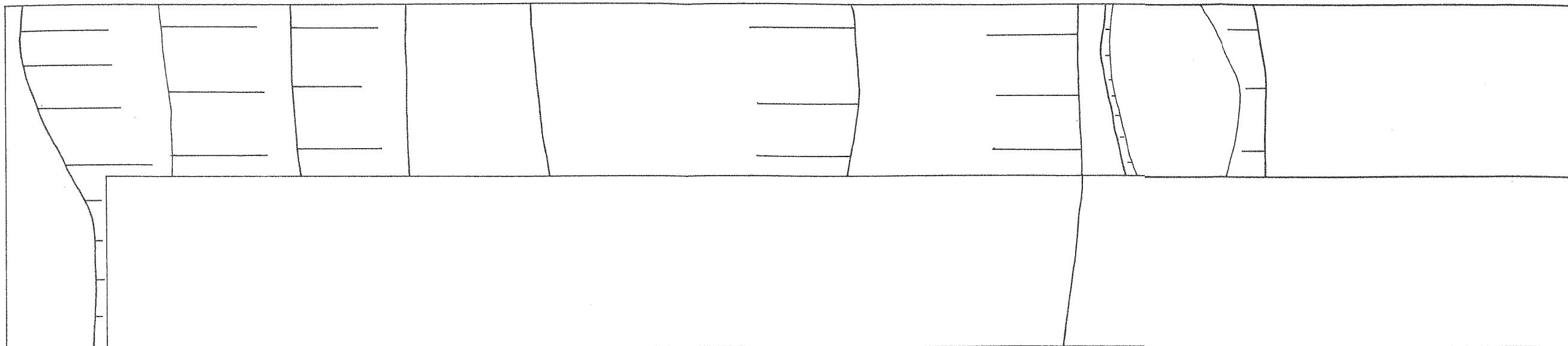
堀の埋土は大きく3段階で堆積しているようであった。

東端部では城床の東端から40mの場所で、これまでの堀に比べるとやや細い堀が確認された。規模は上面幅6m、下面幅70cm、深さ2.1mで内側には階段状の掘り込みが見られる。この堀の東側は現在道路として利用され調査ができなかったが、道路下に潜るよう土層の変化が見られた。

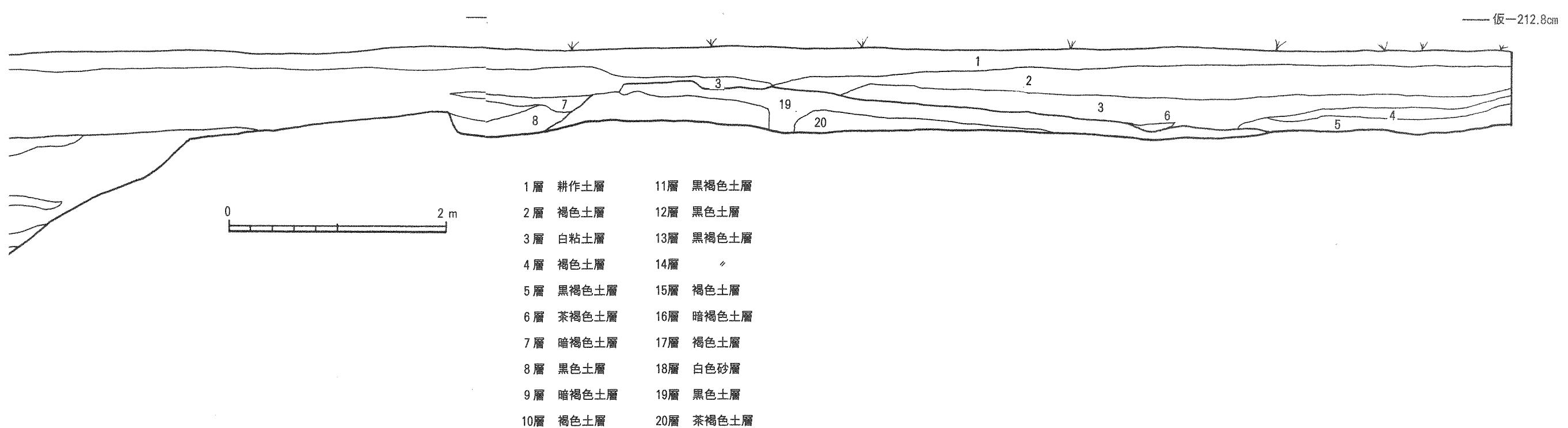
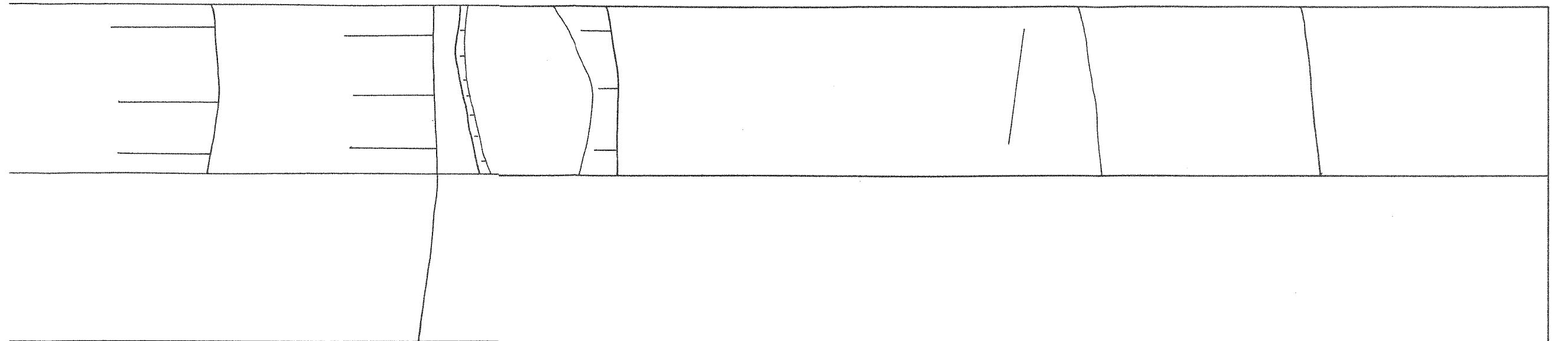
地元の人々の話では、この道路はもともと畠の面よりかなり低くなっていたのを、近年埋め込んで車が通れるように整備したことであり、恐らくこの道路の下にも堀が延びており二重堀になるものと推察される。

したがって城床の周囲を巡っているのが内堀、中央部に出てきた堀が中堀、そして道路に沿って外堀の3本の堀が存在していたことが明らかになった。

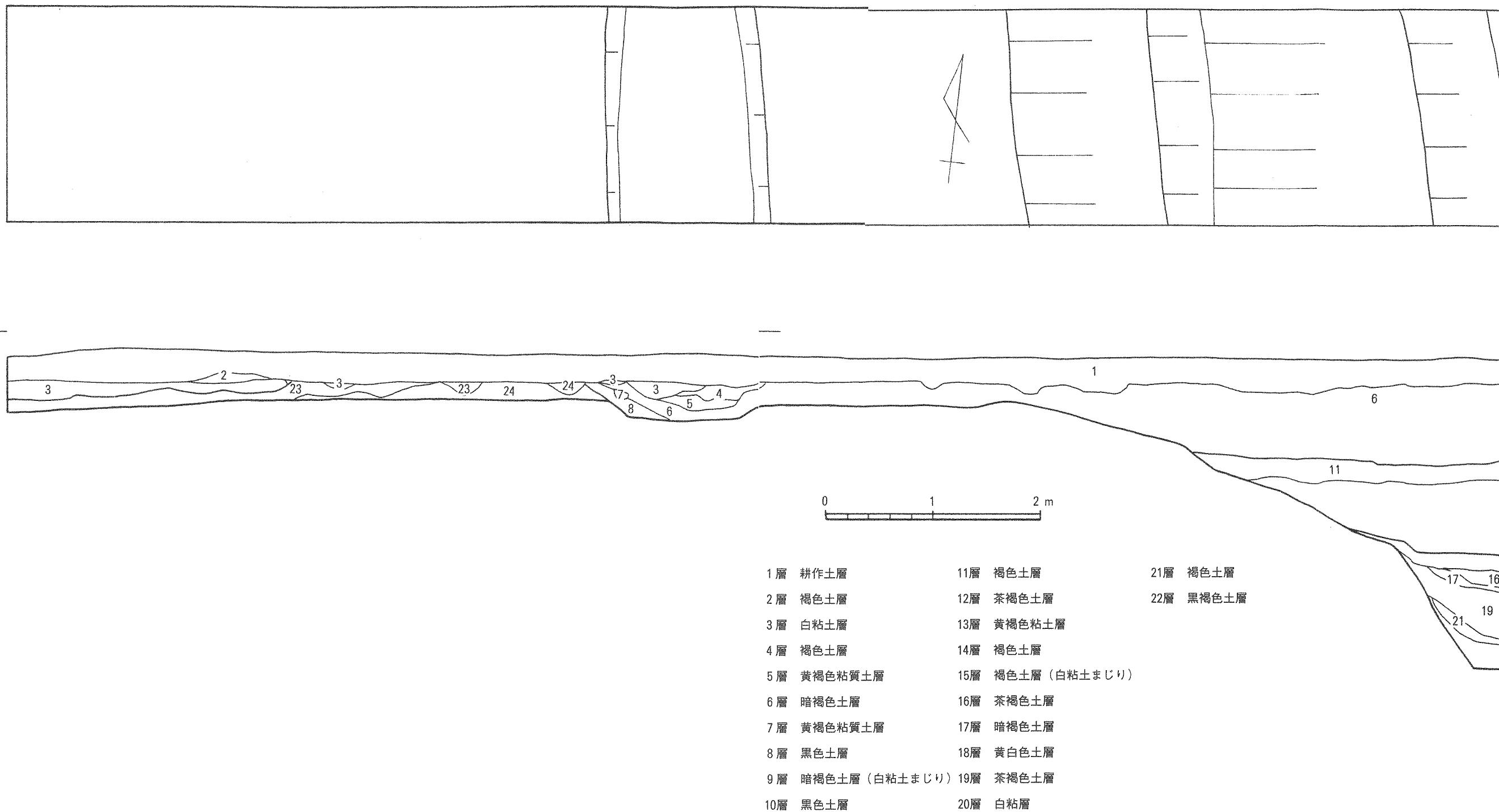
城床の東側で合計3本の堀が確認されたことは、西付城の性格を決定付けたものと考え



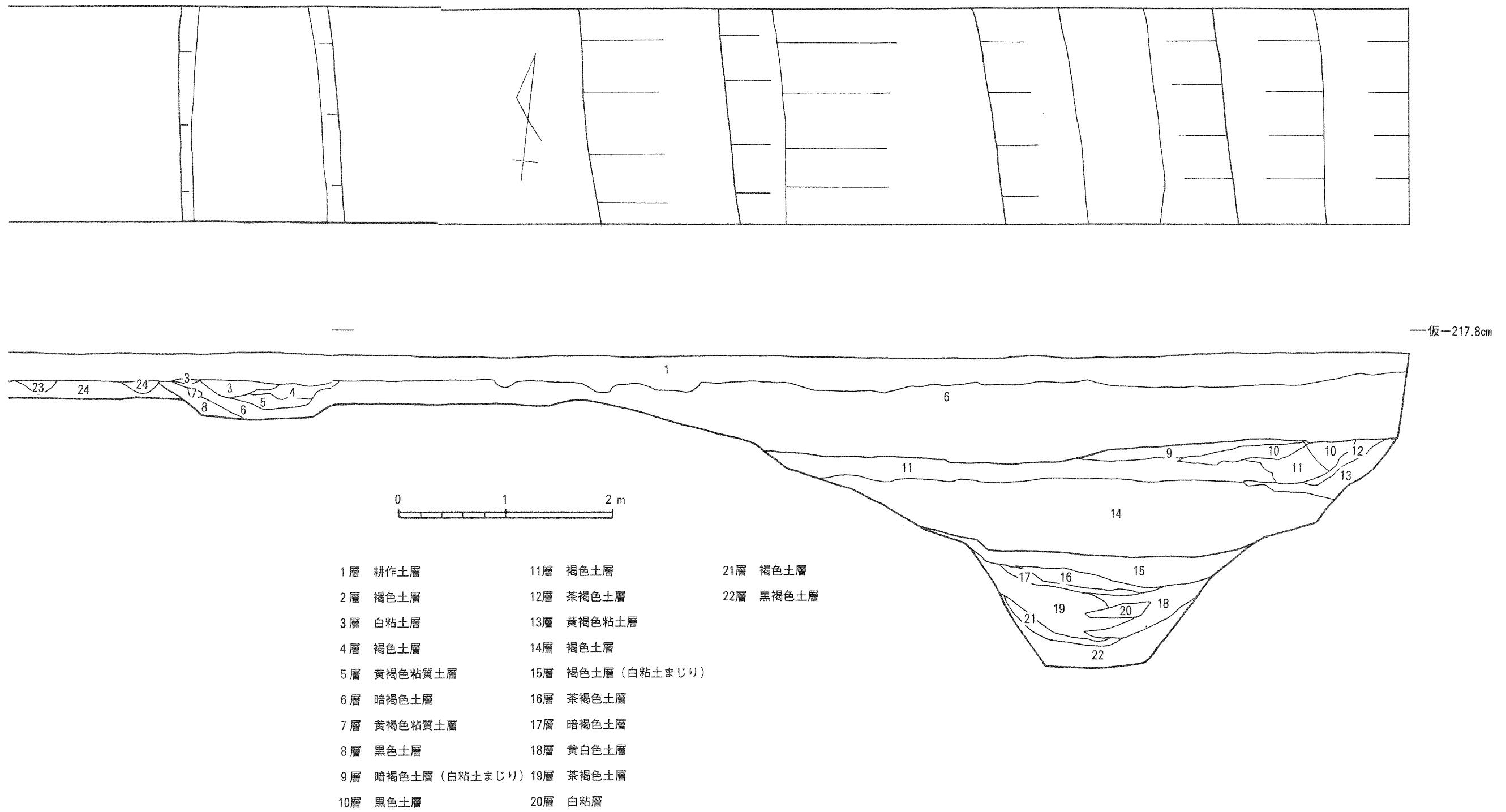
第6図 西側第1トレンチ 実測図



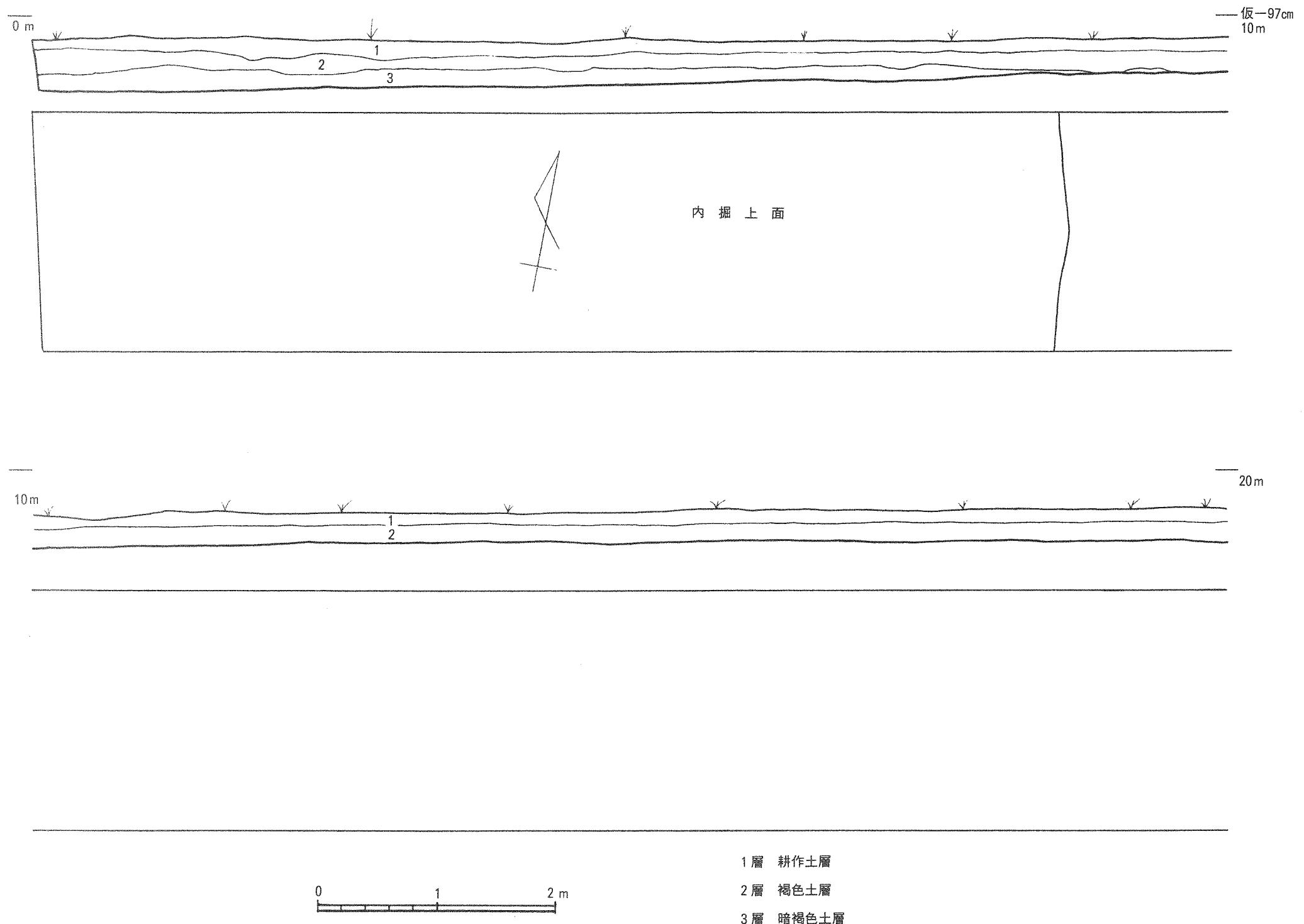
第6図 西側第1トレンチ 実測図



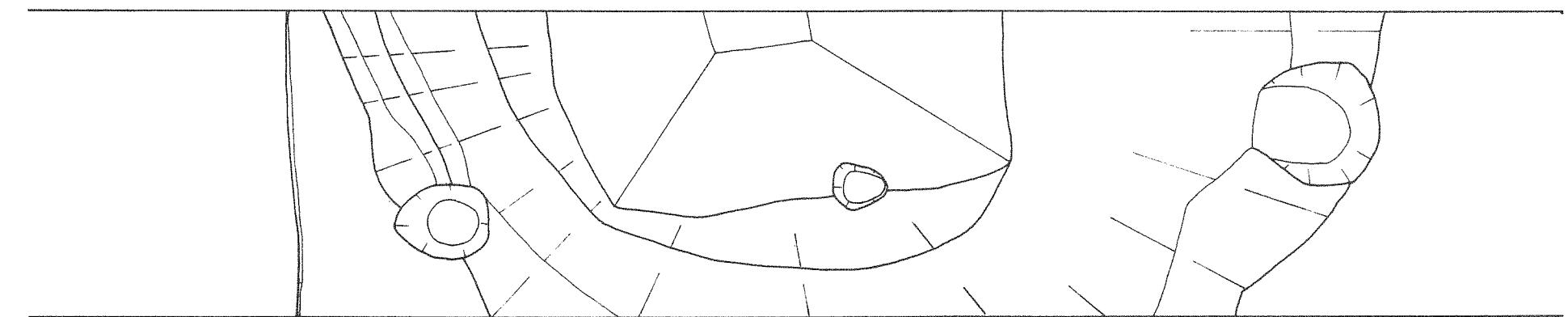
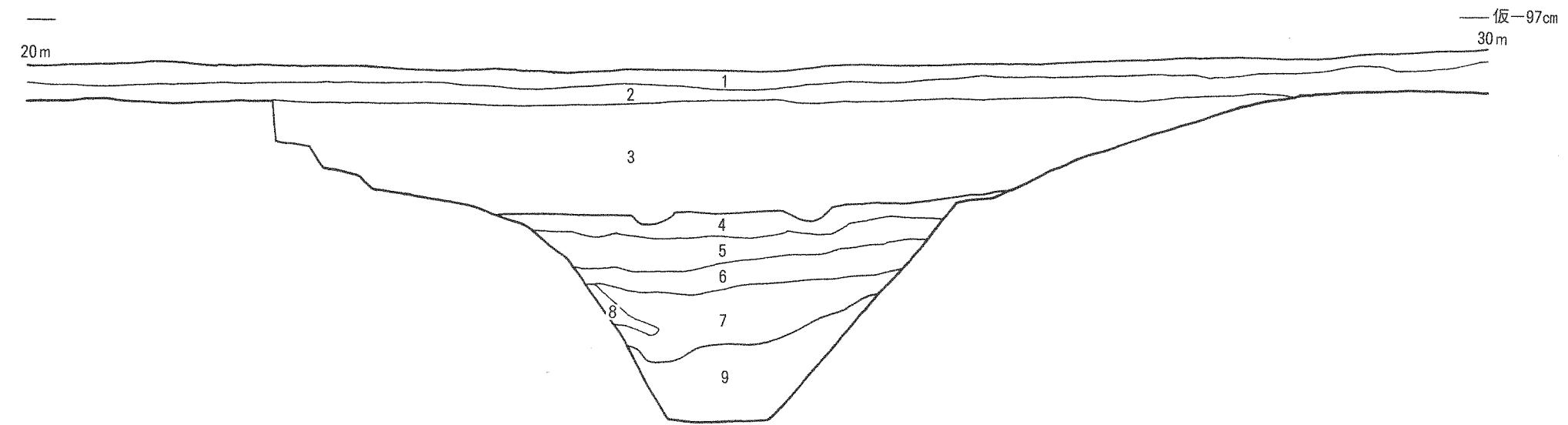
第7図 西側第2トレンチ実測図



第7図 西側第2トレンチ実測図



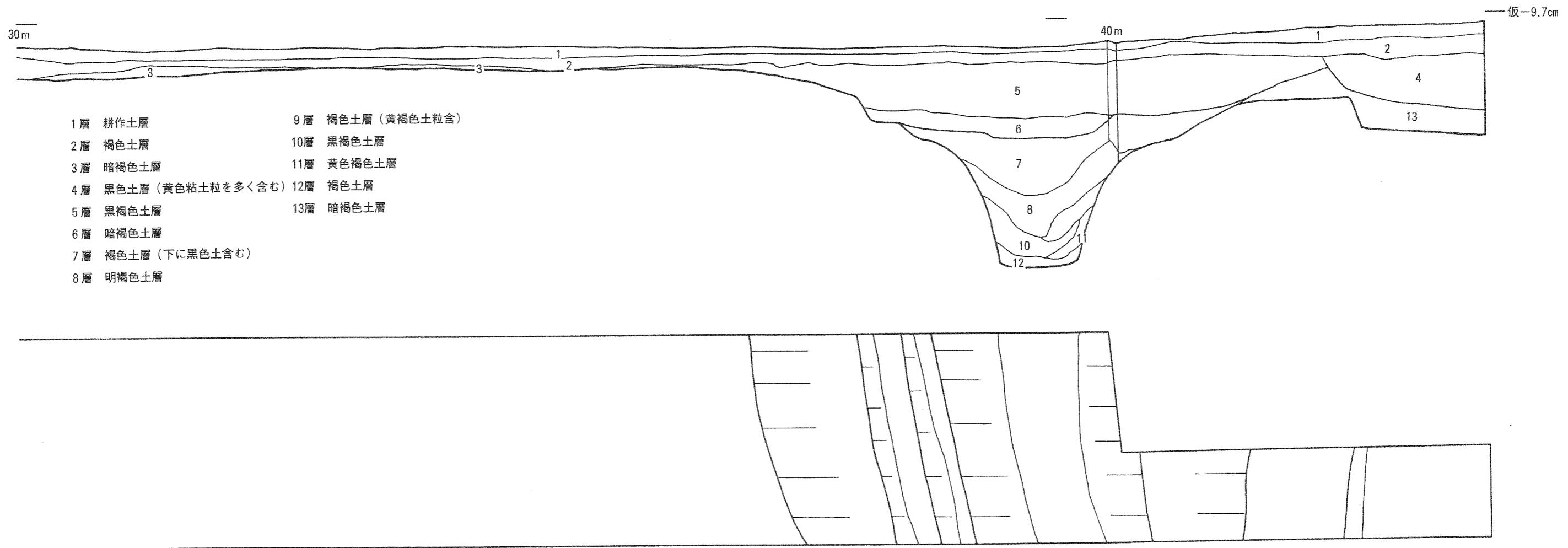
第8図 東側トレンチ実測図（その1）



- 1層 耕作土層
- 2層 褐色土層
- 3層 暗褐色土層
- 4層 褐色土層
- 5層 黒褐色土層
- 6層 褐色土層
- 7層 黒褐色土層（水分多い）
- 8層 明褐色土層（サラサラ）
- 9層 暗褐色土層（ポロポロ）

東側トレンチNo.2

第9図 東側トレンチ実測図（その2）



東側トレンチNo.3

第10図 東側トレンチ実測図（その3）

られる。

遺物は殆ど出土していないが、堀の埋土の中から僅かに数点の陶磁器が出土した。

5 北側トレンチの遺構

ここでは城床の周りに配された堀が曲がる状態を確認するために幅 2 m、長さ約24mで東側トレンチから直角に北方向に延びるよう設定した。

このトレンチはかつて桑畠だったが機械によって抜根作業を行ったとのことで、北側に寄るほど土層の乱れが顕著になっていった。

調査の結果堀はトレンチの南端から 5.5mと 9.3mの間で西側に曲がっている状況が確認されたが、ここでも上面での確認に止どめた。

トレンチ北端では新たに遺構が確認されたのでこちらは発掘を進めた。

トレンチ南端から20mの距離で内側に階段状の掘り込みが見られ、地表下 2.5mまで掘り下げていましたが、調査区内では反対の立ち上がりは確認できず、底も下に傾斜した状態で調査区外に延びることが判明した。また、トレンチの北側には現在切通し状の道路が東西方向に走っており、特に北と東は防御施設が拡充しているようで恐らくこの道路も含めた規模の堀であったろうと推察された。

堀の埋土はこでも大きく 3段階で堆積していることが観察された。遺物の出土は黒耀石製の石鎌が 1点堀の底から出土した。

なお、内堀の上面から陶磁器や土師器の破片が数点出土している。

6 南側第 1 トレンチの遺構

ここでは内堀の状況と入り口の確定を行うこととして、城床南辺に平行して幅 1.6m、長さ 6.5mの規模で設定した。

このトレンチを狭く設定したのは、ビニールハウスのパイプが立ったままになっており、近々ビニールを被て作物を植え付けるとのことで、短期間で終了しなければならず最小限の面積で調査を実施したのである。また、今後の作業に支障を来さないよう遺構上面での確認のみに止どめた。

調査の結果、内堀の内側と端部、土橋の一部が確認できた。堀は東から西に長さ 5 mまで延びているが、その先は土橋になっている。

城床南辺と堀の内側との間には2m程度の間隔があるが、城床の南辺自体が一直線にはなっておらず西半分に比べると東半分では城床が削り込まれているのが観察され、本来の大きさはこのトレンチの部分まで拡張していたものと考えられる。

遺物の出土は見られなかった。

7 南側第2トレンチの遺構

城床南側の畠は地籍上多少入り込んだ形となっていて、南側第1トレンチを設定した畠が一部西側に細長く延びて市が購入した土地の南に接し、さらに南に小さく細長い別の畠がある。かつてはこの細長く入り込んだ畠は東の畠と同じ高さで、前後の畠が低くなっていたとのことであった。

それを近年機械によって削り込んで南の畠に埋めだと所有者は語ってくれた。従って今日では東の畠より西の畠が単純に約1m低くなっているように見えるのである。

そのため入り口の土橋は最も東側に寄っていると考え、さらに城床西側に残っている空堀が東側に向かって曲がり、トレンチの南端に来るものと想定しトレンチを設定した。

トレンチは当初幅2m、長さ20mで城床から南に延びるよう設定したが、北側で内堀の端部が確認されたので幅3.5mまで拡張した。

調査の結果、当初想定した通り内堀の端部と外堀を確認することができたのである。

内堀は内側を調査区外に延ばしているため規模は不明だが深さ2.3mを測ることができる。しかし、西側第1トレンチから連続しており奇しくも市で購入した土地がすっぽりと内堀の範囲と重なっていたことからも幅7m程度にはなるようである。

掘り込みは丁寧で壁面のコーナーはほぼ一直線に立ち上がっており、堀の南側には一段の平坦部が築かれていた。

土層断面から大きく3段階での埋土が堆積していったようである。また、内堀の端部が出たことで土橋の幅が約1.8m（1間）程度であったことが推察された。

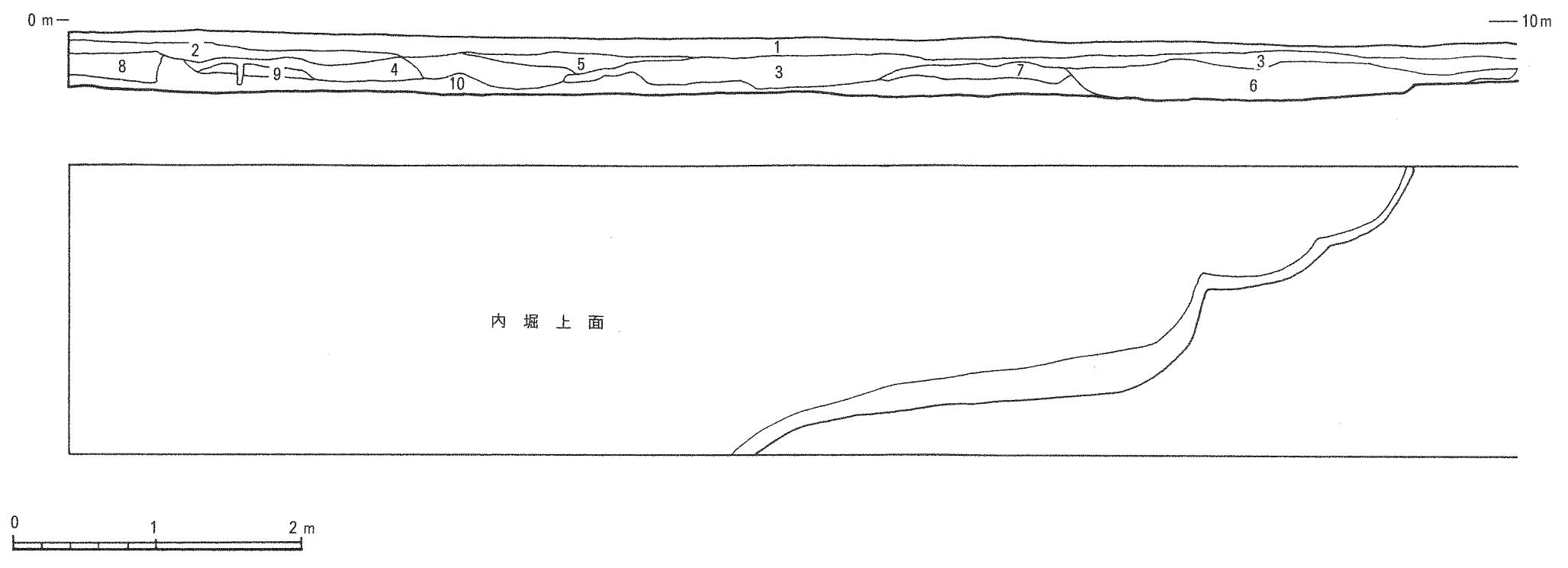
遺物は出土しなかった。

外堀は城床から南に20m離れた位置で掘られていて、上端部の南側は調査区外に延びており正確な規模は不明だが、上面幅7.3m以上、下面幅1.1m、深さ2.6mを測る。

堀の内側には階段状の平坦部がみられ、とくに上端部では急な立ち上がりを見せている。

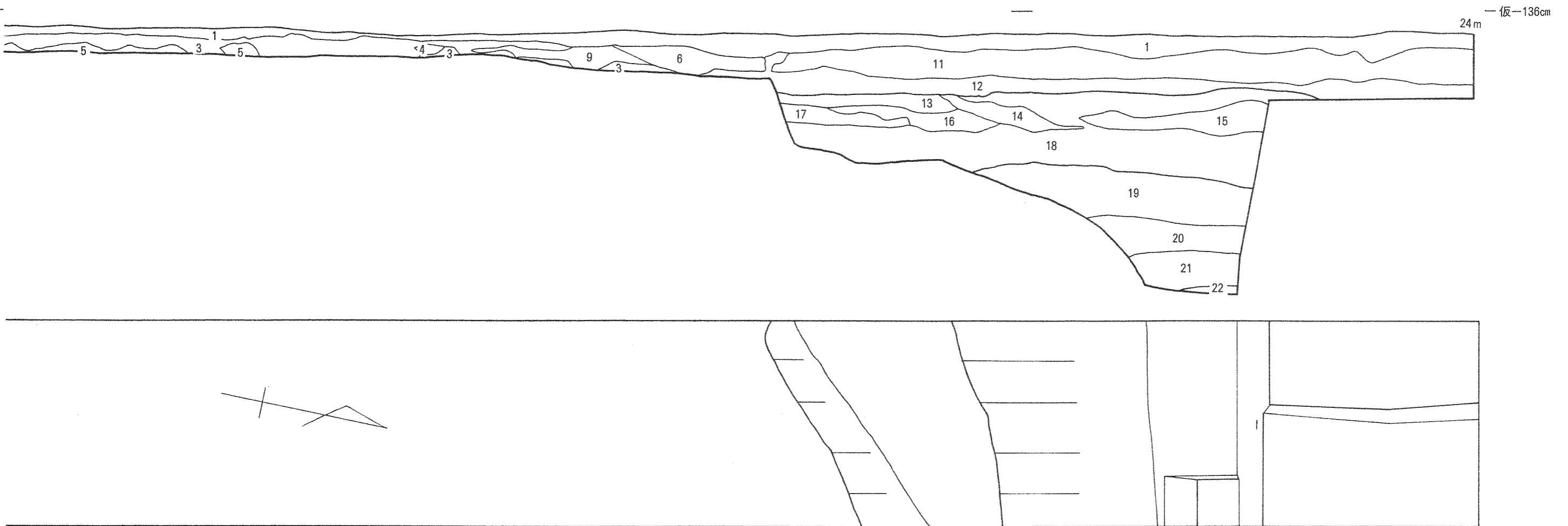
内堀との間の部分を削平していたことも考慮に入れれば、外堀と内堀との間は土塁が築かれていたものと考えることができよう。

土層断面には機械による埋め立ての層とそれ以前の表土層などが観察され、大きく4段

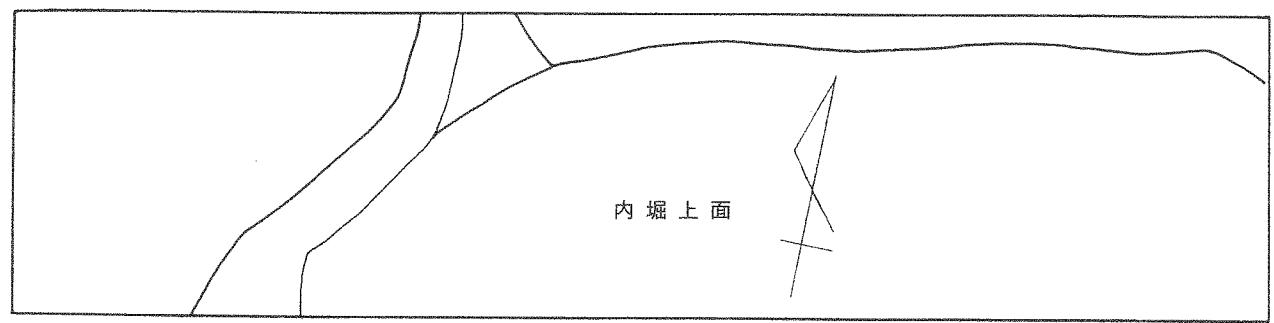


1層	耕作土層	12層	褐色土層
2層	暗褐色土層	13層	褐色土層（黑色土混入）
3層	暗褐色土層	14層	
4層	黃褐色土層	15層	黑色土層（褐色土混入）
5層	茶褐色土層	16層	褐色土層（黑色土混入）
6層	褐色土層	17層	黑色土層（黃色土混入）
7層	暗褐色土層	18層	褐色土層
8層	褐色土層	19層	褐色土層（黑色土混入）
9層	黑色土層	20層	黃褐色土（黑色土混入）
10層	褐色土層	21層	暗褐色土
11層	黑色土層（黃色土混入）	22層	黃褐色土（黑色土混入）

第11図 北側トレンチ実測図（その1）

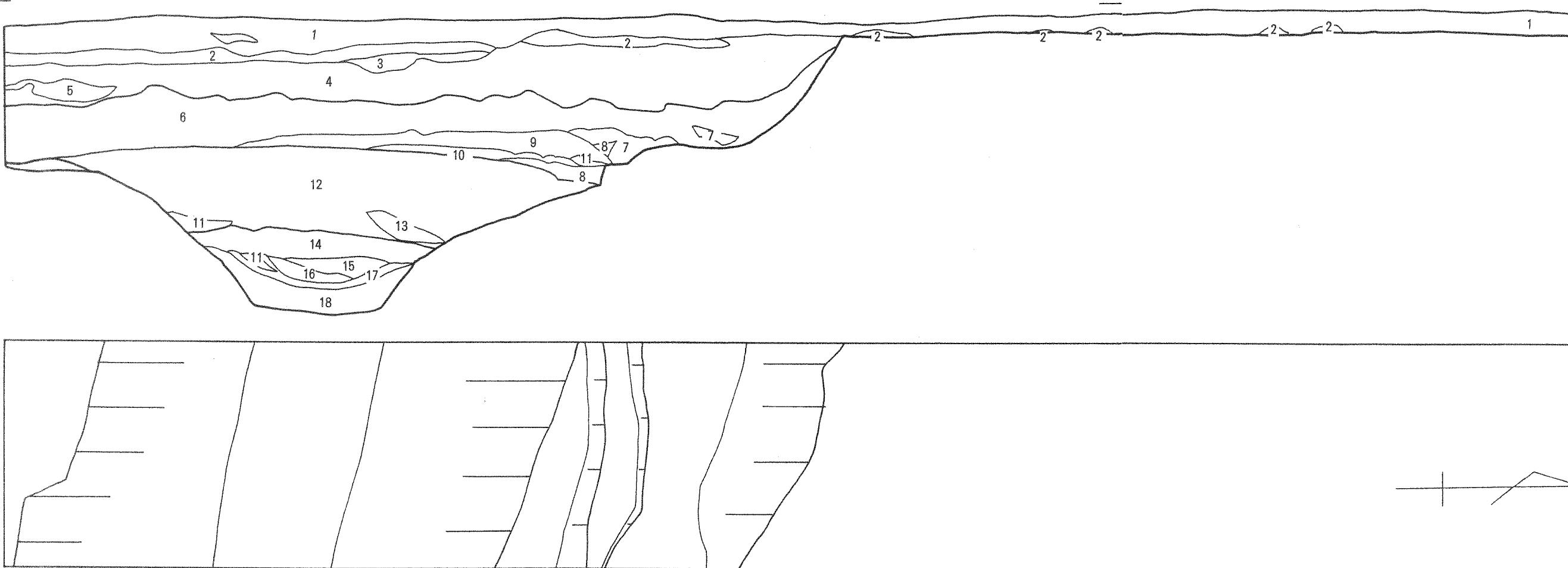


第12図 北側トレンチ実測図（その 2）



- 1層 耕作土層
- 2層 暗褐色土層
- 3層 黄色粘土層（赤色が強い）
- 4層 黄色粘土層（砂礫を含む）

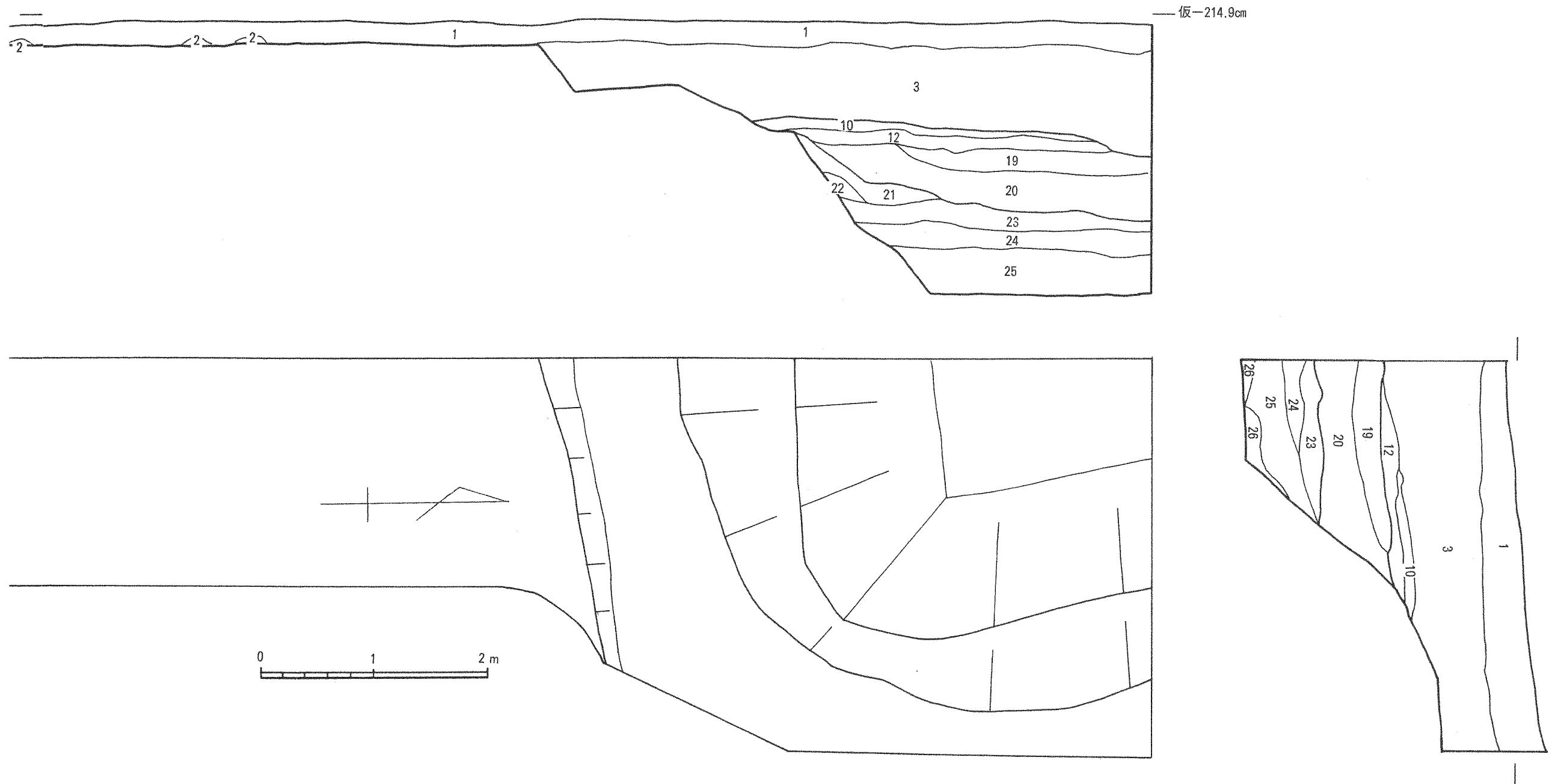
第13図 南側第1トレンチ実測図



1層 耕作土層	11層 茶褐色土層	21層 褐色土層
2層 茶褐色土層	12層 黃褐色土層	22層 黃褐色砂質土層
3層 褐色土層	13層 明黃褐色土層	23層 茶褐色土層
4層 攪亂層（黑色混入）	14層 明褐色土層	24層 暗褐色土層
5層 黃褐色砂質土層	15層 褐色土層	25層 褐色土層（黃褐色土粒含む）
6層 旧耕作土層	16層 明褐色土層	26層 黃白色砂質土層
7層 黃褐色砂質土層	17層 暗褐色土	
8層 黑色土層	18層 暗黃褐色土層	
9層 褐色土層（黃褐色混入）	19層 暗褐色土層	
10層 暗褐色土層	20層 褐色土層	



第14図 南側第



第14図 南側第2トレンチ実測図

階での埋土の堆積が行われている。ここでも遺物の出土は見られなかった。

IV まとめ

肥後国衆一揆を契機に以後の豊臣秀吉は兵農分離を行い、刀狩り令など数々の政策を打ち出している。その意味からもこの戦の持つ重要性が計り知れよう。

今回の調査では遺構の確認はもとより、西付城の構造や範囲まで推察できる材料が得られたものと確信している。

そこで確認された遺構から西付城の構造を考えてみよう。

堀についてはこれまで城村城とは反対方向の西側の林に残る空堀だけが知られていたが、今回新たに確認されたものとして、城床の周囲に内堀が巡らされ、さらに外側に外堀を配していることが明らかになった。また、これらの入口は城床の南側に位置し土橋を築いていたことも明らかになった。

外堀は現在西側に僅かに残っていたが、南側、東側、さらに北側でその存在が明らかになった。これらは完全な姿での確認ではなかったが現在の道路と重複している可能性が高い。

また城村城の在る東側には内堀と外堀との間にもう1本の堀が存在していることが明らかになった。このことは西付城が本来的に城村城に対して防御を強化していることに外ならず、文献に記されているように佐々成政によって天正15年8月13~14日にかけて築かれたものと理解すべきであろう。

関連して東付城の地籍図を見ると西付城との共通性が良く理解できる。中央に縦28m、横32mの城床が在りその周りに内堀が巡り、平坦部（土壘）を挟んで外堀が巡っている様子が伺える。さらに入口も堀の中で地番の境界線が南側に見られるが、恐らくこれがかつて土橋が存在していた跡で、昭和30年代前半の地籍調査の段階では取り崩し畠の一部になってしまったものと理解された。また、これに通じるように南に延びる取り付け道路も作っていたことが理解できる。

残念ながら東付城については昭和46年に削平され現地の状況と地籍図とは大きく異なるが、将来調査が可能であれば堀の状態は明確に出来るものと思われる。

西付城の城床の中にどのような建物が立っていたかについては調査が至らずに終了せざるを得なかったのは心残りであるが、この部分については市が公有化を行っているので、将来の課題としたい。

今回の調査で遺物の出土に期待を込めていたが、残念ながら殆ど出土しなかった。ただ調査面積が狭かったことと、城床中心部の発掘が遺構面に一部しか達しなかった事を考え

ると、将来の調査に期待するものである。この付城の築城時期が天正15年（1587）と明確であるがゆえに出土した遺物の意義が深いことは容易に理解されよう。

全体の形は東付城の方が図面上では端整な作りとなっているが、西付城との関連性は非常に強くいざれも佐々成政によって天正15年に築かれたものと理解すべきであろう。

また、東西付城と城村城との間には、地理的にも平坦に連続しており、現地に立って作業を進めている時感じたことは、果たして城村城に対し睨みをきかせられたのだろうかという疑問であった。

逆に城村城から鉄砲や弓で討って出られた場合守りきれなかつたのではと考えたのである。

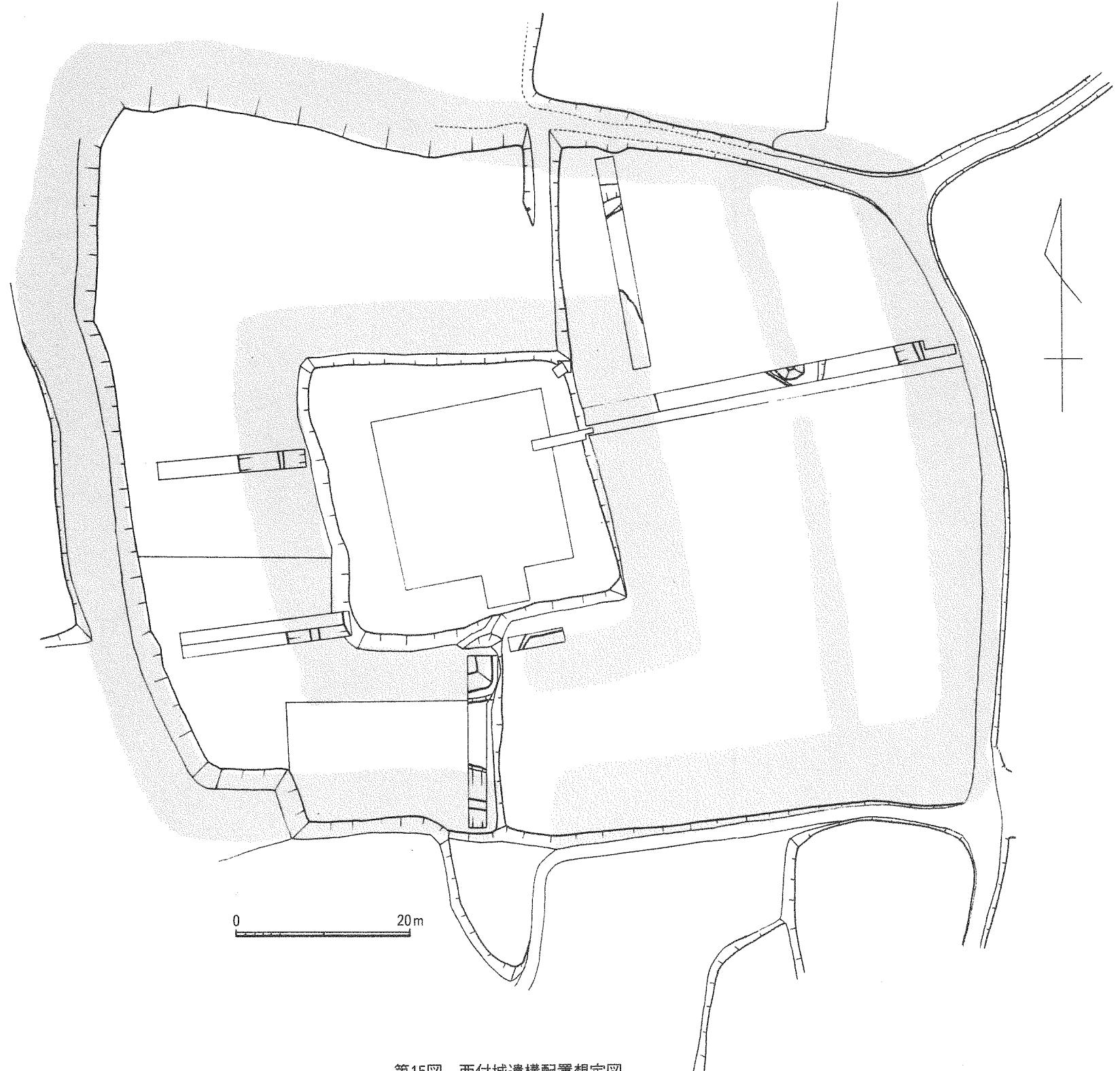
従つて城村城からも簡単に討つて出ることができない別の要因が存在していたものと推察された。

この戦の初期の段階で成政は山鹿に出陣し日輪寺山へ斥候を出し、城村城の様子を伺っている。また戦も城村城と日輪寺との間の岩野川沿いで主に行われており、日輪寺もしくはその近くに本陣を構えたものと考えることができる。

残念なことに日輪寺では明治以前の過去帳や記録は遺されていないとの事で、陣を構えたか否かについては確認されなかつたが、諸条件からも陣の場所としては最も有力な所と言えよう。

この本陣が城村城の東側に位置し、東西付城が南及西側に位置する様に配されていればこそ、それぞれの場所が機能的に城村城に対して威圧感を与えたのではと考えられる。

城村城との間には何ら障害物が無く敵の動きが手に取る様に見られる状態では隈部勢が用意に攻撃できなかつたのではなかろうか。



第15図 西付城遺構配置想定図



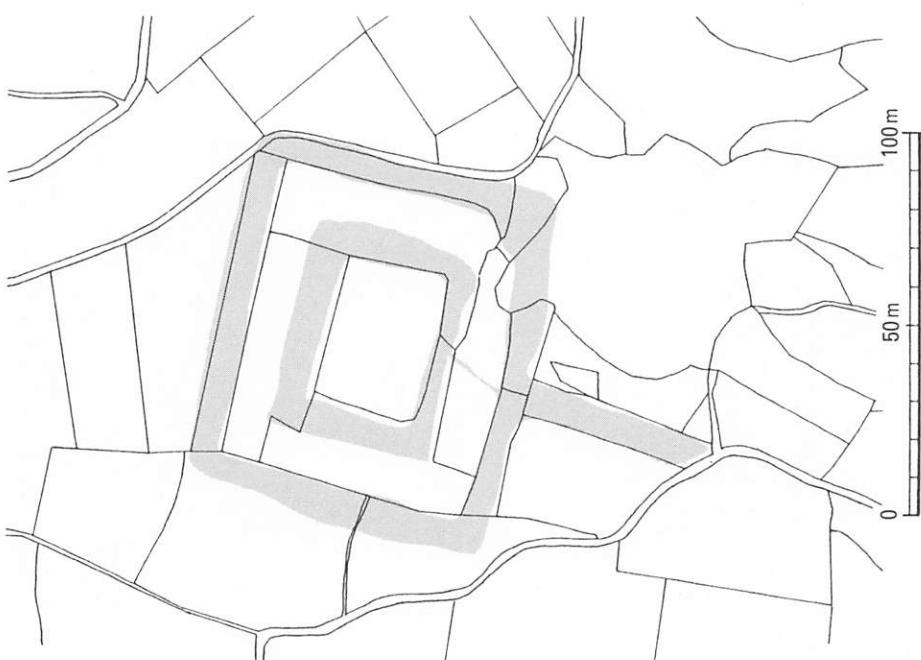
第16図 東・西付城 地籍図

地籍図に残る遺構

西付城



東付城

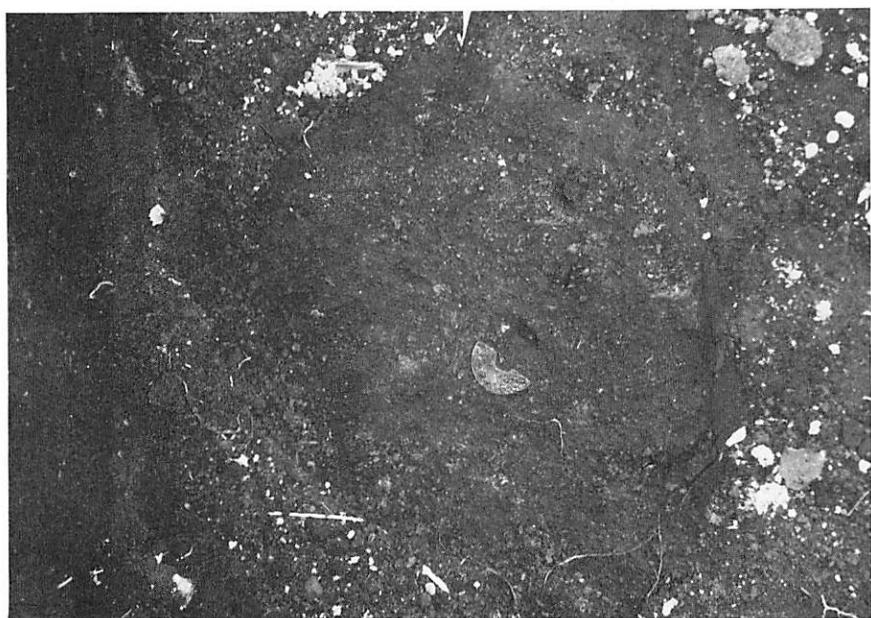


第17図 東・西付城遺構配置想定図

図 版



西付城 城床全景（西より）



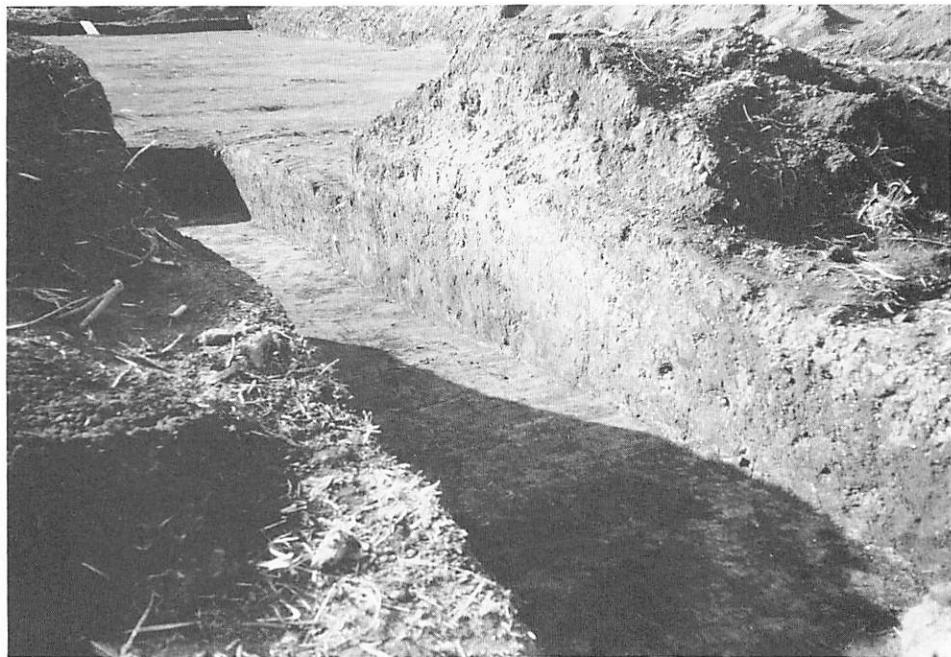
銅錢出土状況
1



銅錢
2



1 西より



中央グリッド東拡張部

2 南東より



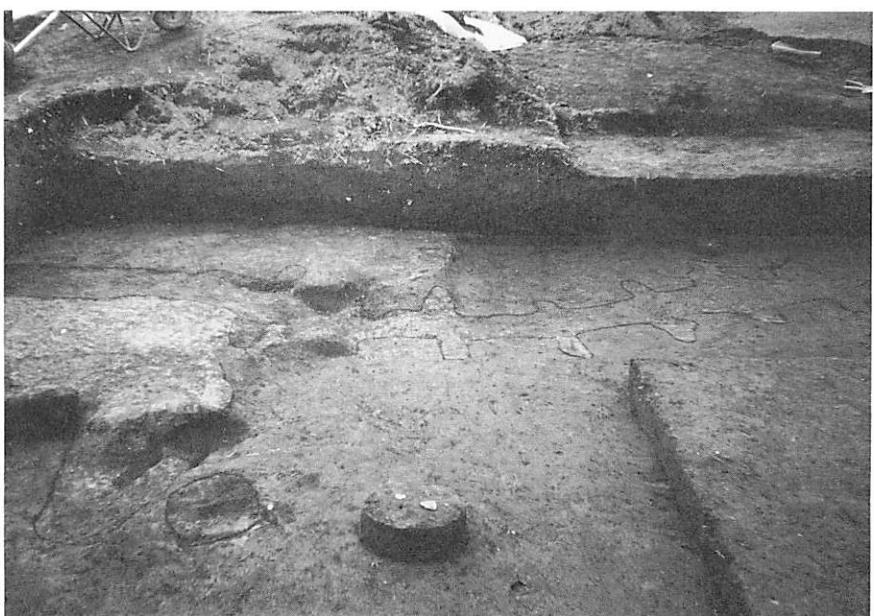
1 南壁面



2 北壁面
中央グリッド東側拡張部



1 中央グリッド東拡張部
柱穴



2 中央グリッド南拡張部
遺構

中央グリッド南側拡張部遺構検出状況（北より）



“”（南より）

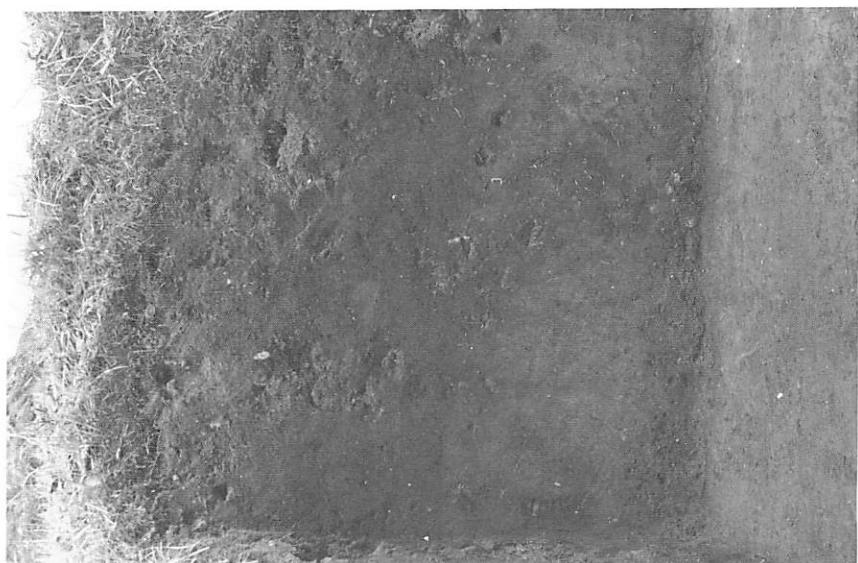




1 東側第1トレンチ (西より)



2 西側第1トレンチ (東より)



1 城床土層断面



2 内堀検出状況

西側第1トレンチ



1 発掘風景



2 内堀検出状況

西側第 2 トレンチ

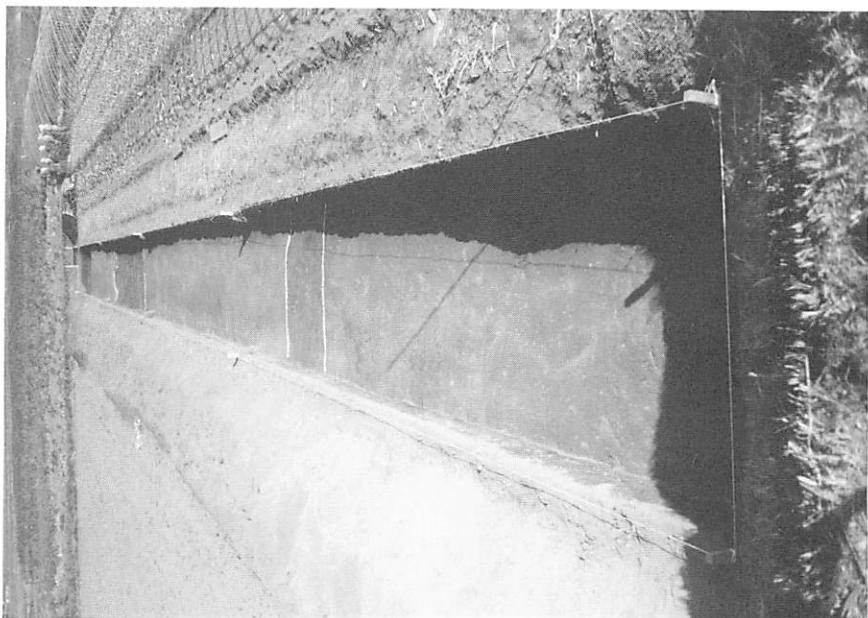


1 全景（西より）



西側第2トレンチ

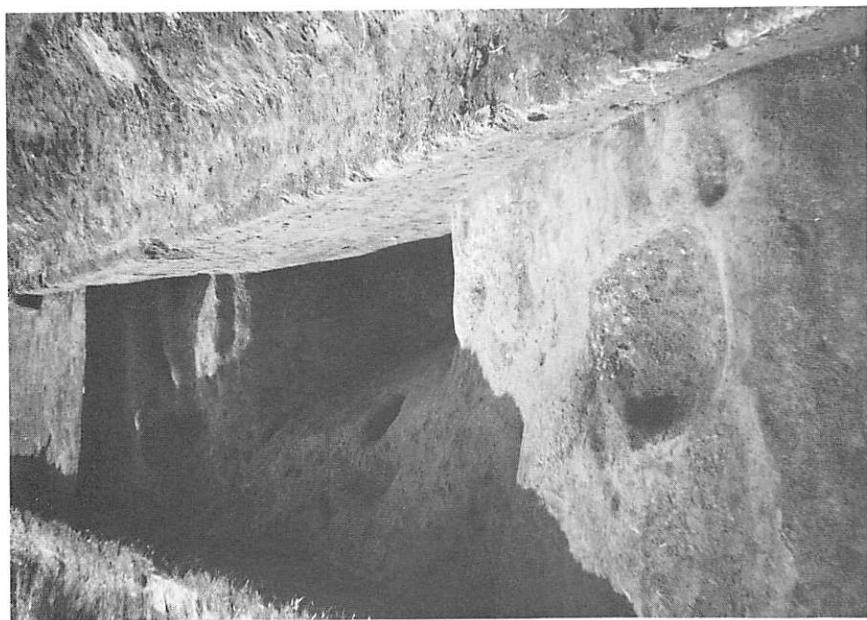
2 内堀検出状況



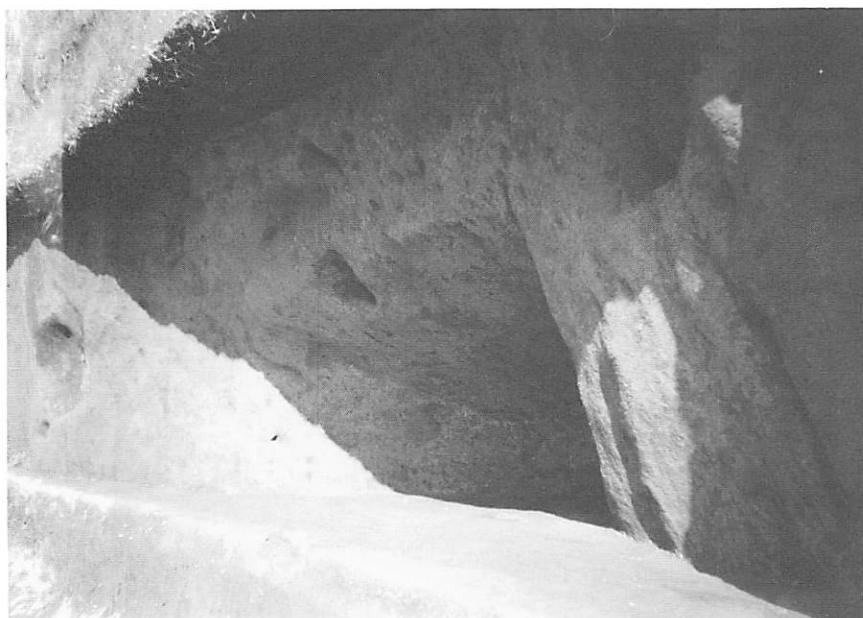
1 東側トレンチ（西より）



2 東側トレンチ（東より）



1 中堀端部検出状況（東より）



2 中堀端部検出状況（西より）

東側トレンチ

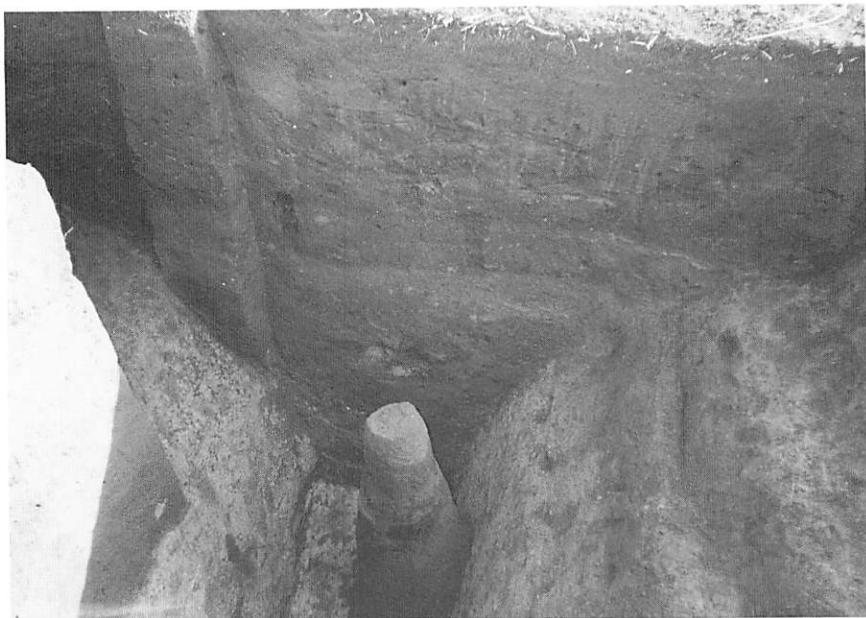


1 中堀端部検出状況（南より）



2 外堀全景（西より）

東側トレンチ



1 外堀検出状況（北より）

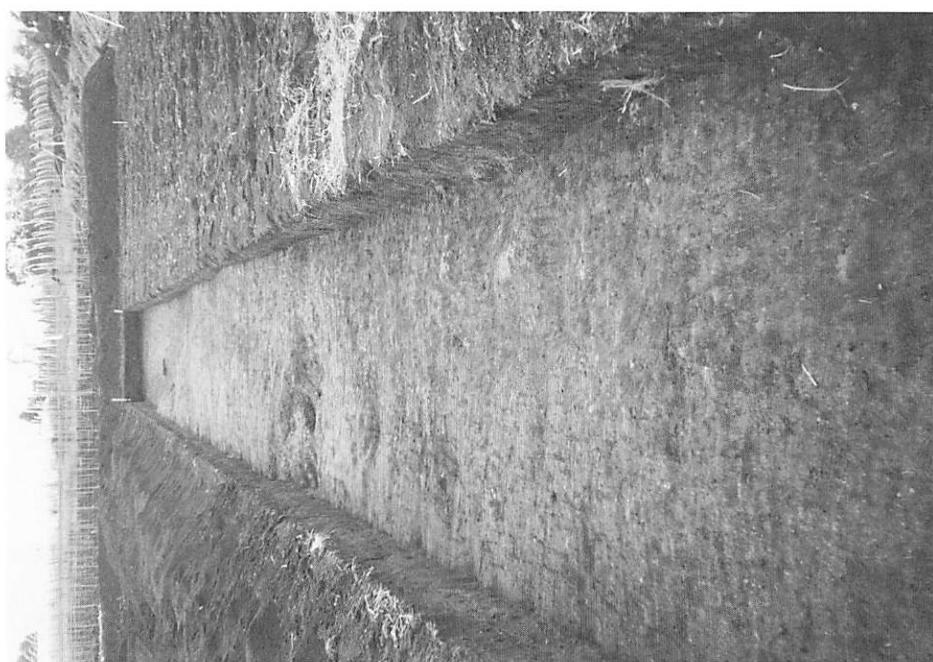


2 外堀検出状況（南より）

東側トレーンチ



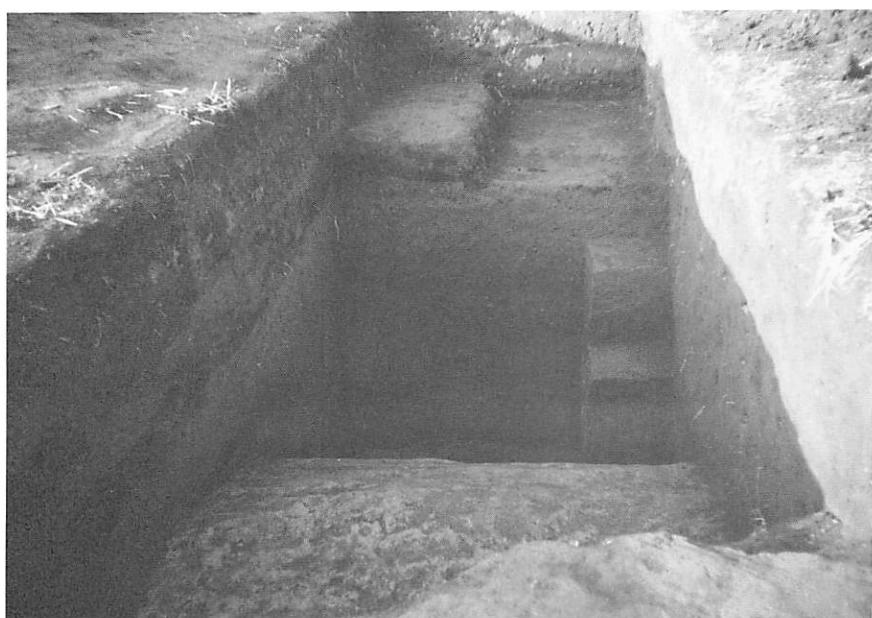
1 全景（南より）



2 全景（北より）
北側トレンチ

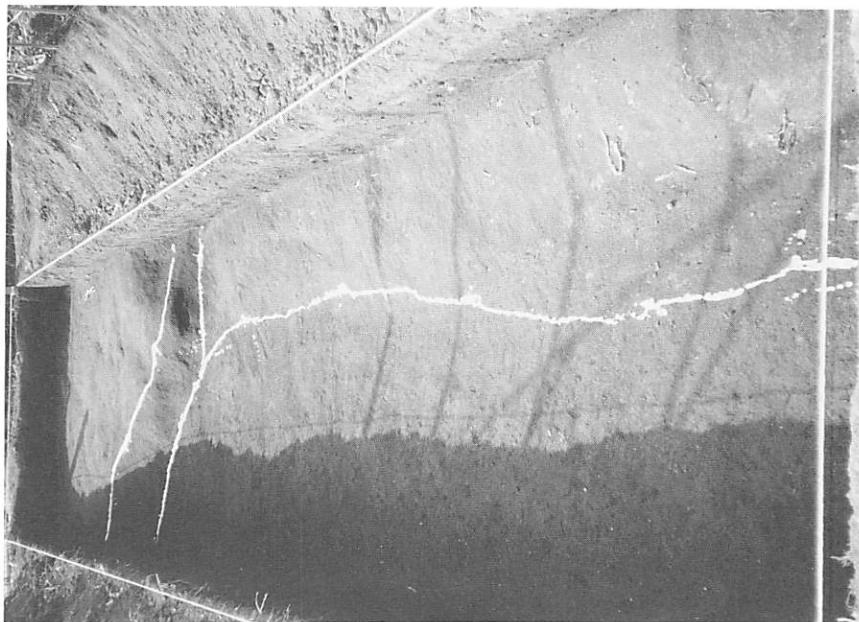


1 外堀検出状況（北より）

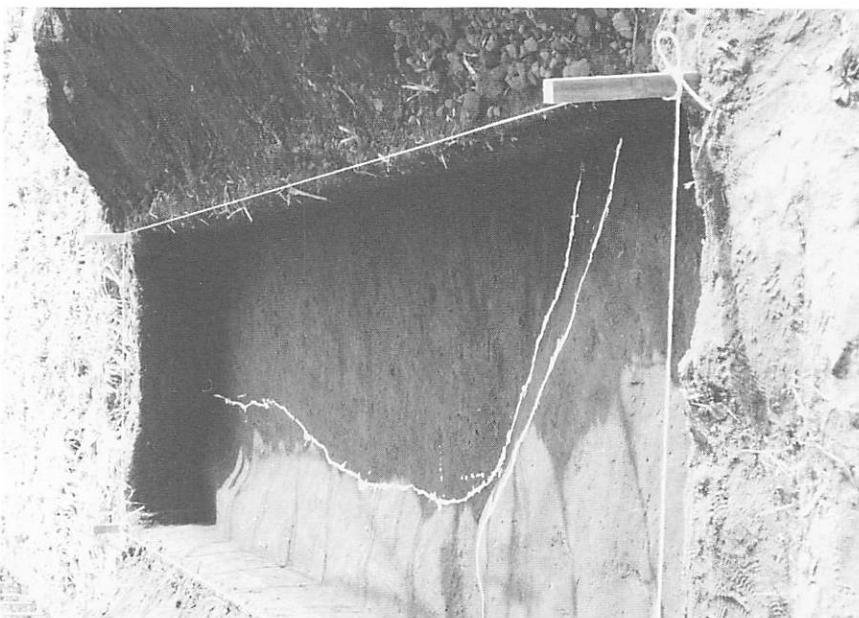


2 外堀検出状況（南より）

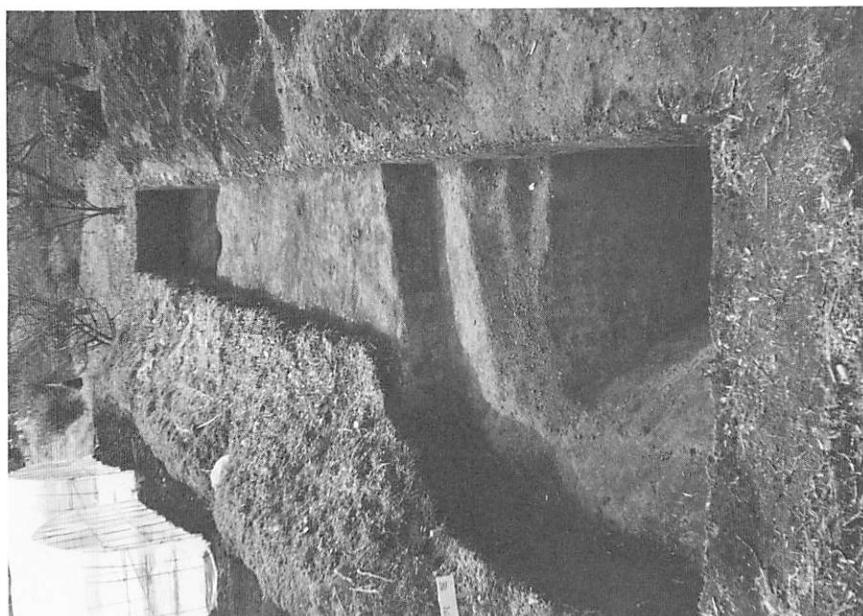
北側トレンチ



1 南側第1トレンチ内堀上面



2 南側第1トレンチ内堀上面（西より）

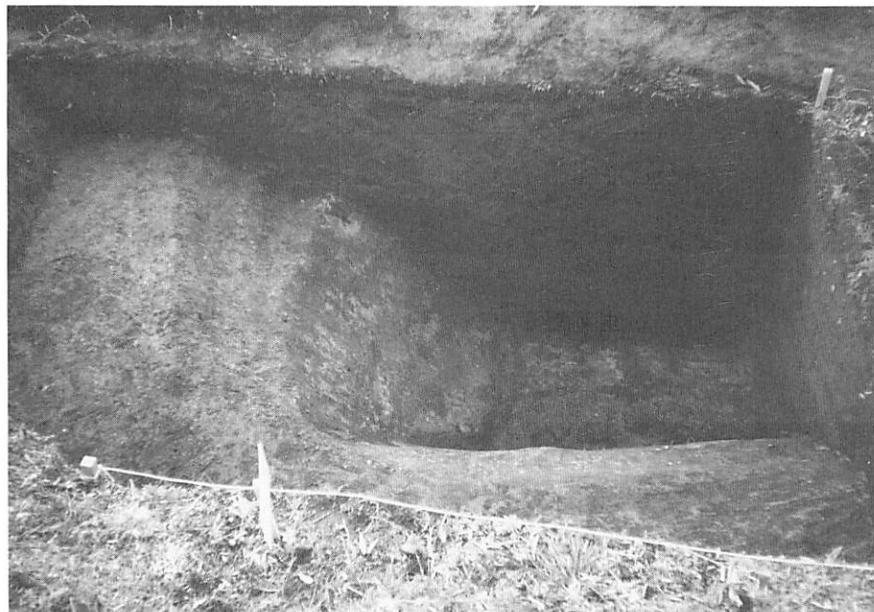


1 トレンチ全景（北より）

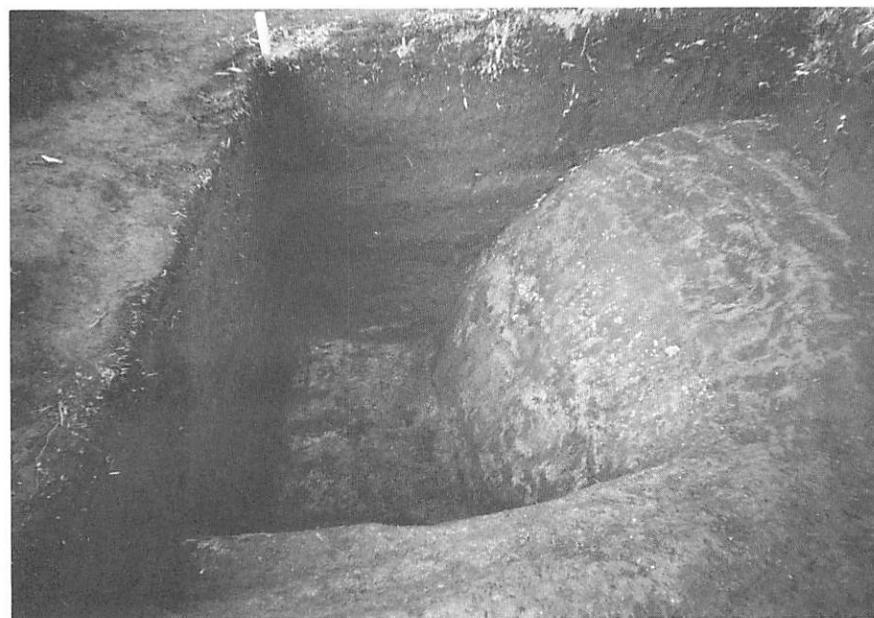


2 トレンチ全景（南より）

南側第2トレンチ



1 内堀端部（東より）



2 内堀端部（南より）

南側第2トレンチ

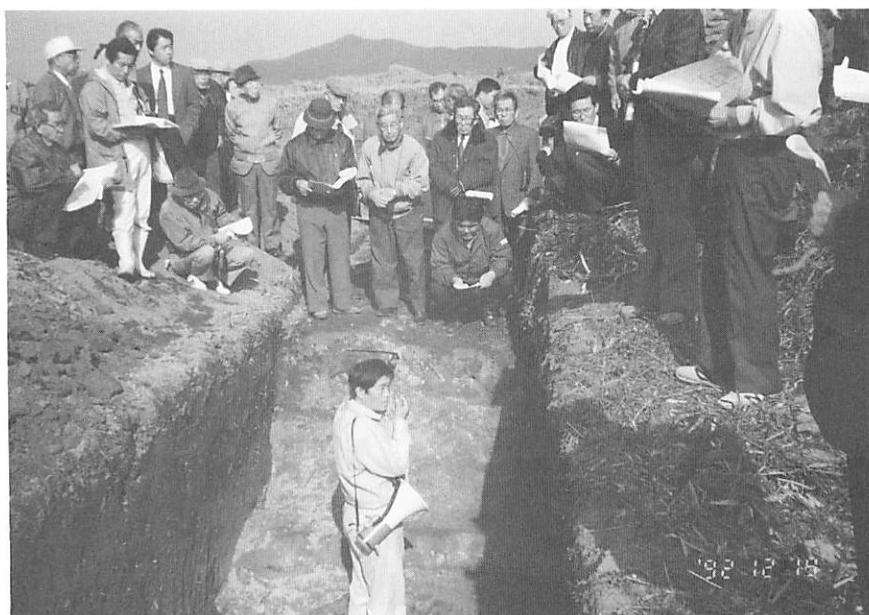


1 外堀（西より）



2 外堀（南より）

南側第2トレンチ



1 現場説明風景



2 発掘調査に参加した人々

南側第2トレンチ

山鹿市立博物館調査報告書 第13集

西付城跡

平成5年3月31日

編集 山鹿市立博物館
〒861-05 熊本県山鹿市大字鍋田2085

発行 山鹿市教育委員会
〒861-05 熊本県山鹿市堀明町1026-2

印刷 熊本県印刷センター

文化財調査報告の電子書籍の末尾に挿入する奥付

この電子書籍は、『山鹿市立博物館調査報告第13集 西付城跡』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

なお、平成17年(2005)に山鹿市、鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町が合併し山鹿市となりました。調査記録及び出土遺物は、山鹿市教育委員会が保管しています。

書名：山鹿市立博物館調査報告第13集 西付城跡

発行：山鹿市教育委員会

〒861-0592 熊本県山鹿市山鹿 987 番 3

電話：0968-43-1651

URL:<https://www.city.yamaga.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2025年7月4日